いのは、富める人の清潔、學問、贅澤の爲めであると考へた。

然し、此の考へは長く續かないでトルストイ自らに悟つたのである。即ち貧富の關係は決して單なる科學的な經濟問題の解し得る所ではない。淺薄な社會學者や經濟學者とは全く異つて深く問題の根柢にまで行かねばならぬと。かくして彼は始めてそこに道德的もしくは人格的な要素を發見した。是れこそ實に科學と道德の調和そのものであつた。

私は先きにラスキンが經濟學を以つて利欲の學にあらざる事、金錢の學とする の迷想を破壞した事につき少しく述べた。今トルストイが同じ思想を持つて居た事につき一言する。彼は矢張『吾等何をなすべきか』の中に金！然らば『金とは何ぞや』と論じて、金が社會制度の中に表はれなかつた時代の民は幸福であつた事、金が便利のものとして、人間生活の一要素となつた時、そこに不幸が生れ、新奴隸が生じ、壓制が行はるに至つたと論じて居る。

彼はラスキンと等しく、アダムスミスの『貨幣にて秤量せらるゝの富』を攻擊して居る。

此處にトルストイの基督教的無政府主義と人道主義との間に如何なる關係があるかについて、私は考慮した。然し私の頭には是の問題を解決するの準備知識に乏しいから、殘念ながら暫らく避けて行く。たゞ彼は所謂無抵抗主義の思想からラスキンと等しく、暴力を以つても決行せんとする社會主義者には絶對的に反對した。

私は最後に、父の遺產の殆んど全部を無くしたラスキンに比して、如何に彼れが貧民の爲め、人類の爲めに、其の財產を分配せしかに就き一言して、ラスキンとトルストイの比較を止め置く。

ロマンローランは次の如くトルストイの個人主義につき皮肉つて居る。（私は是れを讀んで皮肉と考へた。決してトルストイの徹底せる個人主義を惡し樣に言ふのではない）

『彼の個人的生活の拒否は、永遠生活に向つての情緒的高跳に過ぎぬ』

トルストイは、富の謬想や害毒を說きながら、又一方に無財產主義を主張しながら彼自らは眞實に此の富から自由になる事は出來なかつたのである。然し彼は

良心の鋭い偉人であつたからその點については、他人の非難を待つまでもなく非常に苦るしんだ。ラスキンと等しく八十年の長い生涯の終まで彼は自分の生溫るい態度につき惱み通した。

冷たい雪の日に、あの空漠たるロシヤの淋しい村で、悶死した最後の彼の悲劇は生涯戀に破れ、妻に別れて淋しく眠つたコニストンの秋のラスキンの死に、何となく似つかわしい感じがする。

トルストイは富を捨つる事が出來なかつた。でも夫れは彼の汚點とはならぬ。トルストイは音樂の貴族化は墮落だと喝破し、それと同じ樣にラスキンは美術の貴族化も墮落だと言つて居る。ともかくトルストイは實行的の人物であつた。彼の愛は論壇上の愛でなく、彼の救貧事業は歐米の所謂慈善家と趣きを異にして居た。彼の慈善は常に饑饉の時にのみ發現さるゝものではなく、必要あり德義的の意味があるなら何時でも其の尋ねる者の爲めに門はとぢなかつた。彼は徒らに金錢を散ずる事なく常にムジークや勞働者を警醒して、神聖なる勞働の資源を得せしめんとした。然しラスキンはトルストイ以上であつた。

必要に迫られて起つた事ではあるが、近頃の流行は勞働運動である。流行と言つては語弊もあるが、ともかく新聞を見るにつけ此の種の記事が善意の目障りになる。然し一方には文化運動が起こりかけた。否日本では勞働運動以上に古るい歷史をもつかも知れない。左右田博士は文化主義者だ。河上博士は社會主義を主張しながら文化主義の價値を說く。

一切の個人をして各々自己特有の文化價値を實現せしめんとする運動、一切の人をして最も劣惡な人間の水平線にまで引下げる惡平等に墮してはならないとする此の主義……私はラスキンとトルストイの人道主義的立場に associate として嬉しい崇敬の感を起こさざるを得ない。

* * * * * *

人道主義の根本要素は愛である。基督教國に起つた人道主義は、矢張キリストの愛の上にきづかれた。とにもかくにも人間的愛を源として、その淨化されたものが必要だ。今、私はラスキンと同じ年一八一九年に生れたキングスレイに就いて述べねばならぬ。それは人道主義經濟學を論じて、基督教社會主義者の一人に

も論及するの無駄でない事を知つたからである。殊にキングスレイとラスキンとの間には最も共通の點が多かつた。ラスキンが一八五四年、ロンドンのグレートオルモンド街に勞働者專門學校を立てた時、キングスレイも夫れに助力した一人であつた。彼はラスキンと等しく無制限なる自由競爭を抑制して下級人民の幸福を增進せんが爲め、明白に基督敎を社會改革に適用したのである。彼もラスキンも共に、社會の眞の結帶が倫理的精神的原則にある事を主張した。殊に彼は組合を奬勵し協同の精神を鼓舞した。彼の小說 Yeast や Alton Locke には極端に走る者(一種の經濟的直接行動を取る如き過激主義)に對しては無遠慮に反對し攻擊したが、其の同情はもとより富者と爭ふ貧者の側にあつて、かの Chartist と同じ傾向にあつた。

ラスキンも亦、惡しき意味に於いての社會主義を排擊した。勞働者が自ら努めずして只雇主に對して賃銀の値上げを迫り、多數の力を恃んで議會に權利を擴張せんとするが如きは彼の悅ばざる所であつた。一八六七年二月十九日かのサンダーランドのトーマス、ディクソンに與へた書信に次の如く書いてある。

『良い食物、衣服、住居、空氣、是れだけが果して人間の仕事に對して與へらるゝ全部の支拂ひであらうか。安全なる存在 (Wholesome means of existence) を得たらば最う何も要らないのか? Enough, perhaps, if everybody could get these.

と君は考へるであらう。私は今夫れにつきとやかく言はぬ。然し私は思ひ分つて次の事丈けは言ふ。時にはもつと夫れ以上のものを要求すべきであり、更らに夫れよりも偉大なるもの、即ち時には娛樂を求むべきであると。』

ラスキンの娛樂とは、即ち音樂美術等凡て、人心を改造するに有効なる道德的、宗敎的、アミューズメントを指すものである。

* * * * * * *

美術家の制作乃至勞作もラスキンによれば正しい勞働だ。私は此の意味で更らに述べて見たい。

ラスキンとウイリヤム・モリスは同じ傾向を有した社會改良家であつた。『美しきものは永久の歡喜なり、然れども永久に美しきものは又凡ての人の歡喜ならざるべからず』と說いたラスキンの理想も、『美術は、ある特種なる階級の所有すべき

貧澤で無く、人類に取つての一つの必要である。社會は此の貴重なるものを、人民の唯一人からも奪ひ去る權利はない』と言つたモリスの理想も、同じ型の改良家であつた事を證明する。今私はモリスを論ずるの充分の時と知識を持たないけれども、ラスキンの博大な思想を受けた彼が、如何に近世の社會主義、特にマルクス主義の主潮にラスキンの主想を加味して、現代生活の虛僞、貧富の懸隔、英國都市の物的、心的汚穢、勞働者の殘酷なる待遇、全社會の美的趣味の缺乏と墮落に大痛棒を與へたモリスの努力を思ふ時、ラスキンの勞働者に對する態度を追想しながら愉快と崇敬の感に打たるゝものゝ一人である。さて日本に今度の戰爭で勞働不安が忽焉と生れた樣に、ラスキンの在世中、產業革命の結果英國の天地に同じレーボーアディスコンテントの現象が澎湃たる波を立てゝ、その隅に襲つて行つた。

かゝる場合、ラスキンは如何なる態度で行つたか、一般社會に對し一般經濟界に對して、又一般勞働者に對して如何なる主義主張を持つて進んだか。

此の問題につき私はすでにラスキンの人道主義經濟學者としての立場に於いて、少しく論及したつもりであるから今、此處に於いては特に彼れの、對勞働者の態

度を見て少しく論じたいのである。

科學者に社會を改良せんとするもの、藝術的、道德的に社會を改良せんとするもの――此の二つの改良主義が現在の勞働問題にも影響して、一つは狹義の勞働運動となり、他は勞働者の爲めの文化運動となつて居る。○私は科學的のみならず、他のどんな運動によつてでも人類がそう容易く救濟され、此の勞働問題が解決せらるゝとは思へない。私は悲觀論者の一人である。殊に唯物的な社會主義者の說く樣に、今日の社會生活の物質的、唯物的外部全體のみを改良したからと言つて、勞働者の眞の滿足が得られるとは思はない。夫れは無論必要である。又緊急の問題である。けれども夫れが勞働問題解決の全部でないと思ふから今私はラスキンの所論と思想を借用して解明する事を嬉しく思ふ。

先づ第一にラスキンは、勞働者をして勞働する事の悅こびを知らしめんが爲めに、勞働の價値を說いた。彼は藝術經濟學の中に次の如く曰ふ。

『勞働者が劒を取つて、國家に盡すことは中等階級の人が、劒や筆を持つて、國家に盡すと少しも變りはない。勞働者が Parish（パーリッシュ）から年金を受けると言ふ事は、國家

に對して功勞ある中等階級以上の人が、年金を受くること少しも更らぬ。

と言つて居る、又彼は他の勞働階級にあらざる人に對しては、殊に勞働者を輕蔑する事は彼等の生活を自らに輕んずるに外ならぬ事を說く。ラスキンは勞働者が勞働運動をする前に、自らを內省せよと叫んだ。己の價値を知らずに他人に要求する事の不合理を說いた。

彼は或時、ロンドンの Workingman,s Colledge の招きに應じて所謂革新運動に論及した。其の時彼の話の要點は時と潮(タイムエンドタイド)の第三信に述べてある。

『我友よ。諸君は皆議會に代表者を出して、諸君の意見を發表するの特權を望んで居る。斯くの如き特權は、もしも諸君が議會に於いて立派な意見を發表するだけの確信があればともかく、果して諸君に夫れ丈けの準備がありや否や。諸君は仕事を少なくして賃銀を增す事を望むの爲めであるか?、私は希望する。諸君は今少しく賃銀と仕事との關係を良く知らねばならぬ』と。

以上ラスキンの主張する所によると彼は寧ろ、富者、資本家の味方であつて、貧者に要求する所大なるものの樣に考へらるゝが夫は彼の一面である。彼の要求と

希望とは單に勞働者側ばかりでなく資本家側にも要求して居る。私は彼の Sesame and Lilies 中から此の言の誤らざる事を證明する。

○『人間の確實な善事とは(第一)に人々に食を與へる事、(第二)に着物をきせる事、(第三)に住居を與へる事、(第四)最後に藝術や科學等の思想を以つて彼等に滿足を與へる事である。』

是れはラスキンがプロレタリヤ及び勞働者以外の人に向つて要求せる點であり人はパンのみにて生くるものにあらざれども、パンなければ生き行かぬ者の意味を力說した點であつて『恒產あれば恒心あり』の道德から『勞働者に考へ、樂のしむの餘裕を與へよ』其の爲めには社會的組織を變更するの必要ある事を主張せるものであつた。私は今ラスキンの勞働問題につき論ずるのであるが彼の奢侈抑制の必要論は特に資本家貴族に對してなされたものであつた。是れについては私は又別に論じたく思つて居る。

勞働問題と言へば必らずマルクスを想像する。先きに人道主義に於いてラスキンとトルストイを論じた如く、私は此處に、彼とマルクスを引き合せて一言して

見たい。私の云ふ所は淺學の罪で、一種のコジツケであらうけれど、近か頃はあまりにマルクスの時代だから

『マルクスばかりが社會改良家でない。マルクスの徒ばかりが勞働者の味方ではない』

と言ふ心持ちで、マルクスにも敬意を表しながら、ラスキンの德を讃美したいのである。私は先づ次の如く云ふ。『ラスキンも亦資本家を勞働者の掠奪者と言へり』と。

『マルクスの唯物史觀によると勞働者の貧困悲慘の源因が資本家的生產及び資本家的掠奪の結果であると言つて居る。然しラスキンも亦資本家掠奪の事實を認めて、明白に說いて居る。掠奪なる文字はずい分過激である。此の意味の解釋から、多くの社會主義批評家などが種々に論ずる。然かも、科學的社會主義者から樣々に批難されるラスキンが、此の言葉すらも使用し又彼の社會觀が此の點に立脚せる事は面白い、注意すべき問題である。

"The Two Path" の中に、一八五八年二月、タンブリッジ・ウエルスにて講演した『自

然、美術、並びに社會生活に於ける鐵の作用』と題する論文がある。私は其の中に、彼の此の問題に關する思想を發見したのである。

『若し自分で實行する事が出來ずに、之を他人にのみ强ゆるならば、夫れは貧しい者に對する諸種の壓迫中で一番はげしいものである。あまりに多くの事を人に要求するは、是れ大なる壓迫である……』

然るに聖書に示された所の不正な人の所行は『貧しき者が彼の網にかゝるを待つて之を奪ふ』ことである。此の網にかゝるのは、その者の不注意と怠慢による事もある。然し、彼が網にかゝつて後、之れに壓迫を加へ之れを困苦に陷れる者は他の世間の人である。(資本家は即ち此の種の世間の人であり勞働者は亦網にかゝりし者である。)

生計困難と云ふ網にかゝつた者の網をとき、將來甚しく困難せぬ樣に取りはからつてやるべき場合、却つて彼等を掠奪し出來る丈けの力を振つて彼等を一層に苦るしめるのである。

"..... then just at the time when we ought to hasten to help them, and disentangle them,

and teach them how to manage better in future, we rush forward to pillage them, and force call we can out of them in their adversity."

吾々は他人の所得を奪ふ爲めに、或種の責道具を使用する、吾々は拷問機械を用ひる代りに、人の苦惱を利用し、手にピストルを持つて脅す更りに、人の饑饉に迫つた狀態を利用する吾々の Front de Bœuf や Dich Turpin と異ふ點は只彼等の如くに計略に巧みでなく、彼等よりも臆病で且つ殘忍なことである。彼の亂暴な貴族や横暴な强盜はたゞ富んだ者のみを相手として其の掠奪を加へるのである、然るに吾々は常に貧しいものゝ所得を盜む(小林一郎氏譯)

ラスキンは諷刺家である。コリングウッドは彼をビクトリヤ時代の最も卓越せるユーモリストと唱へて居るが、今私の拔書きせる、言葉の中にも資本家を諷刺せる、殊に大工場を有し機械を私有する資本家が如何に勞働者から多くのものを掠奪しつゝあるかを諷刺せるものがあるのを見て痛快を覺えざるを得ない。

思ふにラスキンは科學的に、理論的に、實證的に、マルクスの如く此の掠奪說を唱へなかつたが、彼は決してお人良しの資本主義辯護者でもなく又勞働神聖論者で

も無かつた。

私は此點につき特に科學的社會主義者がラスキンに相當の敬意を表してもいゝ事と思ふ。

一九〇三年にベルンスタインは Socialisme et Science なる一小著を公にして、マルクスの科學的社會主義を攻擊した。彼れによればマルクスはあまりに自然科學の價値を過信仕過ぎたとの事である。トルストイは反對に心的改革を過信した故に社會改良は精神的療法に重きを置かねばならぬと唱へた。

今私はラスキンを過信する事によつて彼が物と心の偉大なる調節者であり、今日尙ほ彼れの態度は充分に讃美せらる可きものであることを嬉れしく思ふ。

三　ラスキンと美術批評

ラスキンの經濟的美術觀と云ふ自分の拙ない一文も、此の(三)によつて終りにしたい。彼れの美術觀に、經濟的なる形容詞を附加したばかりに、私は思はずも、彼の奢侈論と經濟眼とを簡略に述べて來た。かくしてやつと美術批評家としてラス

キンに及ぶことが出來、淺學ながらも東洋の一學生が、此の靜かなる英雄を讃美しつゝ自らの修養の資とした。

ラスキンの研究者は彼の偉業を分かつて三種とする。不思議に夫れが彼れの年代順となり、(一)詩人として(二)藝術批評家として(三)經濟學者又は社會改良家としてのラスキンに區別されて居る。

藝術批評家としてのラスキンは其の大部分美術批評家としての彼である。音樂批評家としてのラスキンに關する論文は私の手許にたゞ一つ外かない。夫れは A. M. Wakefield の『Ruskin on Music』で、是れは自分がオックスフォードの一古本屋で偶然目つけたものであるが、誠に簡略で趣味に富んだ長論文である。

美術批評家としてラスキンを知るに最もよい本は The Art Teaching of John Ruskin by Collingwood. であろうと思ふ。友人文學士矢田部達郎氏の好意で此の著の存在を知り、英京に渡つて、始めて重要なる私有財として熟讀の上、我が頭に忘るゝ事なき寶物となつた。本來この本は美學の見地から記るされたものである。けれども ラスキンについては大少漏らさず何事も知つて置きたいと思ふ私の心から、理

解出來ぬところは捨てても かくも讀み終つた。この著述によつてこそラスキンの美術觀が多少なりとも自分に理解されたのである。

ラスキンの自叙傳 Praeterita によれば彼の繪畫をけいこしたのは十歳の頃である。一八三二年十三歳の時始めてターナーの繪を見て感動したと言ふ。彼が父と共にターナーびいきになつたのはこの以後だつた。その十七歳、ブラックウッドマガジンが『自然を無視せるものは實にターナーなり』と惡評した時、彼は大いに是れを辯駁した。この論文が Modern Painters の第一章となつたのである。

"The Magagine (review) raised me tothe Black Anger" Praeterita

ラスキンはターナーに對する冷評に對して餘程おこつたものらしい。一八三六年十月クイーン・アン街に住つて居たターナーにラスキン父子は滿腔の同情を表した手紙を書いた。ターナーは非常に嬉れしかつたろう。

『我が親しき友よ、あなたの親切と熱心に謝する事を許るせ。私の作をかくまで主んじブラックウッドマガジンの冷評に對して御身を惱ませし事を心より感謝せしめよ』

是れはターナーがラスキンにあてての返事である。

嘗てエミール・ゾラがロマンティズムを捨てゝ自然主義に奔せた時、マネーやセザンヌは理想派を嘲つて、印象的繪畫を描き、その爲めにサロンより排斥せられた事があるときく。

私は今ゾラとマネーの親しい關係をラスキンとターナーに見出したのである。

一八七九年以後ターナーの師は主としてレイノルドであつた。彼は言ふまでもなく他日風景畫の偉業を創始したターナーに影響を與へたのである。然しラスキンによるとターナーには彼身體の Original Character があり、決してレイノルドの感化を認められないと評されてる。第三者は是れを評して、ラスキンの過讃であると言ふ。私にはこんなことはどうでもよい、たゞ該博なラスキンの批評乃至辯護がたとひターナーに取つてありがたき禍であつたとしても、夫れが Turerian Mystery とまで讃美されて、藝術界の美談として存在すれば結構である。

ラスキンはずい分悲しい淋しい戀の持主である。終生愛を說いた彼もこんなに寂寞たる愛の經驗者であつたかと思へば私共後につゞく者は轉た感激にたへ

ぬ。戀と病に惱めるラスキンが第五回のアルプ旅行から歸へるとハーンヒルの家に閉ぢ籠つて一八四二年の秋と冬とをモダーンペインターの著作に耽つた。

私は一日自動車をやとい Brantwood Denmark Hill, Herne Hill Charch, を訪れて青年時代少年時代の彼を追想したがロンドンの町にアンニユイを感ずる東方よりの旅行者に取つては誠によいトウリツプである。

E. T Cook のラスキン傳によると彼は近世畫家の一部を終る毎に其の兩親と從妹のメリーに讀んできかした、其の天分に嬉れし涙を催さしめたとある。かつてベーコンがスコラ哲學派を攻擊せる如く又ルソーが自然に歸へれと叫んだ如く、ラスキンは時弊を打破し新らしき美の眞理を說き、いやしくも學究に無用と思はる傳說すら排斥しなかつた、自らを謙つて自然に赴かしめんとせる努力は、Poussin や Claude も Prout や Fielding も淺薄とまで批評せられ、ターナーに至つては神意に近かいと推奬せられた。

ラスキンは警鐘を亂打する如く英國の青年畫家に訴へた。『純一の心情を以て往け、如何にせば最もよく自然の眞義を描破する事が出來るかを考へよ。此外に

何も考へる要が無い。忠實に勤勉に自然と歩調を合せよ。何物をも排斥せず等閑にせず又何物をも嘲罵する勿れ』と。

近世畫家第一卷の公刊された時は美術界、文藝界に紛々たる議論が沸いた。匿名の著者に向つて美術家連は悪評を奉つたものもあるが多くの文藝家は彼れの批評眼を讃美した。

ラスキンの自叙傳によると、デンマークヒルに移住したのは實にこの頃で一家は一八七一年まで即ちラスキンの母の死ぬまで住んで居たのである。其間に三十以上のターナー物五十六のハント物が所藏せられたと云ふ。

其後のラスキンの父は一層にターナー贔負となり又其の子の著作に補助する所極めて大で、一八四四年五月第六回目の瑞西旅行となつて、ラスキンは山岳者と美術家と地質學者との三教養を受けた。ラスキンは悪しき意味の早熟である事は彼れの幼年時代少年時代の傳記を渉りても了解さるゝのである。ジョン・チュアート・ミルも早熟であつた。然し彼れにはよい父があつた。ラスキンにも良い父があつた。ミルの父は哲人で學者であつた。ラスキンの父は温情と趣味に富

む富者であつた。ラスキンを產んだ父もミルを產んだ父も此の兩者を育くんだ英國の天地も何となく豊かに靜かでせせこましくない。

一八四四年夏ラスキンは巴里のルーブルに伊太利の古代美術品を見て感激した。此の感激は彼の著作上に大變化を伴つたものである。彼は三十二歳の時に伊太利に遊歷したが其時はまだ彼は古代美術に對して極めて冷淡であつた。今日端なくもチチアン・ウエロネース、ベリニ・ベルギノの偉大なる作物に接して自らの偏狹と迂愚を悟つたのである。ターナーを以つて古今獨歩と獨斷した彼は今ターナー以前にターナーの存在するを悟つて始めて美術史の忽諸に出來ない事を悟つた。

思ふにラスキンが近世畫家の第一卷を公にしたのは二十四歳の時で、其の完結までには十七年の長きに亘つてゐる。私は筆の進むまゝに記憶をたぐりて彼の靜かな事業を繪いて見る。

一八四四年の秋から冬にかけては彼は中世の歷史と美術に研究の全力をそそいだ。その結果ピサやフレインツエに訪れんとするの心止み難く、父母を殘して

の初旅を味ひつゝその僧庵や堂守の間に蹌踉し思考し、書作し、あのモンテ・ローゼの麓たるマクニヤガに至つて更らにサントゴタルの峠を越え至る所恍惚の遙ひに耽つて、一週間の後更らに歩みを轉じてベネチアに行き終にスクオラ・デ・サン・ロッコに入つてチントレットの繪畫に親しく接した。彼はブレーテリタに述べて謂ふ、

『自分の生涯の方向を決せし事柄の中、ロージャースの著「伊太利」を贈られた時、アルプを初めて見た時、イラリアの墓、モンブラン・ルーブルの博物館内のベロネーズ以上に感激せるは此のサンロックのチントレットなり。』

實に彼は是れ以來ベネチア派の畫風を崇敬して而も一層にベネチアの歴史を研究するに至つた。一八四五年の冬から四六年にかけて彼は近世畫家の第二卷を草し四六年の夏刊行した。ラスキンは又旅行した。彼が故國を去るやすでに衆人の推重するところの大美術批評家であつた。歸國せる彼は文藝界の中心人物となりクオータリーレヴユーやクリスチャンアートの執筆家になつた。彼の著作は益々進渉して近世畫家の第五卷を發行するに至り、ついで一八四九年『Seven

Lamps of Architecture』を著した。然らばラスキンの七燈とは何ぞや――眞、美、力、犧牲、服從、勞働、記憶の七概念を指すものである。

彼は是れ等の眞善美の諸觀念の爲めに聰明と熱烈と雄辯とを以つて其の文を綴り、其の内には多少の矛盾や粗野の詭辯が藏せられて居るが、ともかく其の眞理に至つては、窄乎として動かすべくもない、是れを要約すれば、

○『眞に次ぐものは美だ、美は自然夫れ自らの建築に於いて求められる建築術は又之を建築せし人の生活、風俗、宗教、感情を披瀝する……要するに美術は道德上知力上、民族上及び社會上の理想を表明すべき所以の器具方便であつて、夫れ自體一の目的たるにあらざるは健全なる建築の性質である』

尙ほ此等の問題につきては後に述べたく思つてるが、ともかくもこゝに現はれたラスキンの美術に對する概念は、自然を離れて人間の幸福なく、人と自然と共在してはじめて人生の幸福と美の福祉が發揮せられ、人を解釋者として自然は其の美を發揮すると云ふ彼の主張を明らかにせるものである。即ちラスキンが其の音樂論に於いて自然を離れた音樂の墮落と、崇高なる音樂の存在は人の力と自然

の力とこの美しいハーモニーにのみ期待さるゝと言及したるに一般である。

『Stones of Venice』は建築の七燈についてものせんとした新著である、其の評論する所將に七燈の敷衍であつて信仰、思想、慣習の國民に表はるゝ形式即ち人間の藝術や家庭生活や公私の建築物に對する動的、靜的の現象を明らかにせんとするものであつた。

ラスキンは言ふ『國民の歴史は書籍よりも寧ろ正實に其の石片の上に記錄せらる。何んとなれば、偉大なる國民性は偉大なる建築の上に刻まれ、劣等なる建築は國民の不德と恥辱を物語ればなり』と。

ベニスの石の目的は彼の藝術哲學を以つて社會改造論に結ばんとするの要鍵であつた。一八七七年のラスキンの手記の中に次の如く記るされたのも將に其の一證である。

○『ベニスの石は建築美術の法則を敎へ、凡ての人間の工作の美は是れを作れるものゝ幸福なる生活によるものなる事を示さんが爲め也』

是れを作れるものゝ幸福なる生活とは即ち人間の經濟的生活の重要なる部分を

指示するものである。健全なる精神は健康なる身體に宿る如く、眞の美術も健全なる經濟事情による事を說く點に於いてラスキンの經世家としての價値がある。社會主義者の所謂人間の精神生活は物的條件に支配せらるゝ事大なりと云ふ原則に似たるものでありラスキンが決して單なる精神主義でなく或意味の物質論者であつた事を認めねばならぬ。此の意味より一層彼の美術觀が有意義であるとと思ふ。

一八五一年の夏彼は『ベニスの石』の初卷を公にした。建築家批評家の一部には彼を比難するものも多かつたがトマス・カーライルの如きは大いに是れを讃嘆した。今最近まで生きて居た英國の大評論家フレデリック・ハリソン氏のラスキン傳より拔書すれば次の如くである。

"A strange, unexpected, and I believe, most true and excellent Sermon in Stones, as well as the best piece of schoolmastering in Architecture, borom which I hoke to learn in a great many ways……. It is a quite new Renaissance"

これこそ思ひがけなき奇異且つ眞實に秀絶した石の說敎であつた。建築の最

良教科書であり其の批評的研究の目的精神こそ實に當時の一大特徴であつた。カーライルは呼んで『全く新しきルネサンス也』と叫んだのも無理でない。

彼は一八五三年の春『ヴェニスの石』を完結した。Frederic Harrison はヴェニスの石と建築の七燈を比較論評して次の如く言つて居る。

『ヴェニスの石は七燈の趣味を具體的に擴張し建築物に對する公私生活の影響の'Historical and material proof'を提供せんとの目的で書かれたもので、七燈より想像に乏しく議論も僅少であるが所謂修辭によつて破らるゝ事はない。却つて其目的が一層確實に認められて居る。是れは全くラスキンが全力をヴェニスの建築物に集注したからだ』

ストーン・チブ・ベニスに現はれた彼の經濟的美術觀は近世の機械的工業が齎す道德上、社會上、審美上の缺點を指摘攻擊せる點である。今是れについて詳しく述ぶる時と記憶を持たぬが要するに近代の勞働者が機械の奴隷に成り切つて居る事を切言せるものでかの勞働商品說と聯想せらるべき好題目である。

一八五一年から一八六〇年までのラスキンは純然たる美術批評家であつた。

されどその評論が單なる藝術論に止まらで經濟的批評論に立入つて居た事は公明の事實である。

* * * * * * *

一八五一年 Euphemia Gray を慰さむ可く書いた King of the Golden River が出版された。一八四八年四月十日彼はスコットランドのペルス――最近の日本の皇太子殿下が御訪問せられた美しい町――で結婚した一八五三年悲しい離婚の問題が惹起した。彼の愛の經驗は此上なく寂しい。

* * * * * * *

ハリソンの著書によると其後のラスキンは美術批評書として Pre Raphaelitism を出版した。ラフエル前後の運動はホルマン・ハントやダンテガブリエルロゼチの始むる所でミレーやバーンジョンスも是れに讃同して居た。この著の出版されたのは十二月十九日ターナーの死んだ日で、英國繪畫史にニューエポックを劃したものであつた。一八五二年ラスキンは更らに Arundel society の爲めにハドアなるギヨットウの壁畫に就いて一書を著作した。

彼の美術史上になしたる最大の功績の一ばギョットウの眞價を認めて是れをダンテに比した點であつた。ラスキンも云ふ。

『Of all the painters of the world none, unless it be Leonordo and Michael Angelo, give such signs of intllectual Power as Giotto.』

彼は此の年、處女講演をエデンバラーの哲學協會で、建築繪畫に關する總括論をなし翌年再び瑞西に旅行して『近世畫家』の完成に努力し、一八五七年 Elements of Drawing を著した。

同年有名なる "Political Economy of Arts" をマンチエスターで前後二回に亘つて講演し此の論文は其後一八八〇年 "A joy for ever" として公刊された。一八五九年彼は凡てに豫言者の立場にあつて社會改造論を試みつゝあつたが其の所產として有名なるは The Two Path である。

以上記する所彼の美術批評家としての生涯と著作の概略である。自らの淺學を顧みず以下今少しく細論に立入つて其の經濟的美術觀を掲げて見たい。

* * * * * *

自然と美術——自然の貴い意義を現はす事を閑却して、たゞ美術の爲めに發達した美術は人間の高潔なる性質を破壞すべきものであると言つたラスキンの思想は彼の著書中至るところに散見せらる、殊にサウスケンシントン美術館の會館式になされた講演

The Deteriorative power of conventional art over nations

中には一層に高調せられて居る、私は一日何心なく此の美術館を訪れ(友人穗積君の案內)其の案內記と少史とを見て此の講演がラスキンよりデリバーされた事を知り深い興味の心持ちで一覽した。

ラスキンは一八五七年の夏スコットランドの北方を旅行したが、彼の美術眼に入つたものは殆んどなく物寂しい感を與へられたものゝ尙其の地方に見らるゝ建築物は多少優雅に感ぜられ、彼の半生が南のアルプやイタリの勝景に保護せられた美觀に支配されたに反し、此の旅行にて始めて人工的價値の少ない自然に育くまれた美術の價値を知つたのである。彼はスコットランド人と何事にも意匠を凝らす印度人の通有性とを比較して

素朴なハイランド人の格子縞の Chepucis と精巧に仕立てられた Cashmere の着物と、果してどちらに高尚な美の心が含まれて居るか?』

彼は自らに此の反問をして極めて明瞭な答を與へて行く。たとひ美術を愛する國民でも可なりの醜い歴史を持つて居るに反し、美術を無視する國民性の間にも尚高潔な行動の歴史が認められて居る。實に印度史とハイランド史は此の消息を物語るものであると。ラスキンは美術の目的に何時もモラールの意味を附加してるのであるが此の講演に於いても暗に德性なきの美術は民族墮落の表現なりと說いて居る。彼はリデア人がメデア人に、アテネ人がスパルタ人に、希臘人が羅馬人に、羅馬人がゴート人に、バルガンデー人が瑞典人に征服せられた事實をかかげ、更らに或國民の美術がその最高調に達した時には、其の國民の衰亡を暗示すると說いて居る。

『私はハイランド人の間に美術の見るべきものなきに失望した。然し彼等の有する自然の勝景と其德義心との關係を考へて讃嘆せざるを得なかつた。彼等程自然の美と力とに感情を動かされ、主義も理想もインスパイアされた國民は

あるまい。スコットやバーンスの詩を見よ。如何に自然の美と德を謳歌せるか。

美術がすでに奢侈放縱の風を養へる國民性を見よ。彼等の爲めには御空の星も、明るい空も、高潔な山も、ない。花は咲いても彼等の爲めに咲かず、野山の鳥も彼等の爲めには動かない。彼等はたゞ不健全な空想と怪しい幻影に圍まれ、暗らい牢獄に其身を閉籠めて居るのである』

彼は自然の美なくして、人工の美のみに生く國民性と自然の美のみを有して人工の美なき國民性の兩極端を比較して此の結論に到達して居る。美術がたゞ美術の爲めにのみ存する時は、美術家が interprets or exhibits するにすぎなくたゞ Does and produces する時である。此の時こそ美術は國民に恐ろしい感化を與へる。其處にはもう人類に對する惠みも、導きも、光も、力も、恩澤もない。

長谷川如是閑氏の第四階級の藝術と言ふ論文の中に私の感じた數行の句があつた。ラスキンとほゞ同じ思想の經路と思ひ此處に拔書させて貰らつた。

『哲學者や藝術家と云ふものは自分達ちの世界を最も一般的な世界から引き離

さうとする傾向がある。彼等自身が一般的な世界の所產であると云ふことは十分意識して居ても、彼等の無意識の心理が其心理を裏切る事が多い。それはつまり哲學や藝術やが個性の强みから發したものである必然の結果である。

……何時も同じ樣に現實の生活からはなれて一種專門的な心理の生活に耽ける境遇をもつものである。哲人は鋤鍬をもたないのは無論のこと、ろくろく飯も喰はずに哲學を考へると云ふ生活をする。藝術家も亦現實の生活からはなれて想像の世界に耽溺する。この事が世界に立派な哲學や藝術やを產み出した原因であると同時に其の立派な哲學や藝術やを大多數の生活と全く沒交渉にして仕舞ふ原因でもある』

大多數の生活と沒交渉にして仕舞つても、夫れが自然に適い、眞と美と善に倍くことなくば藝術が藝術の爲めにのみ存してもラスキンの說くごとき問題はない。偉大なる藝術が一般性に乏しい場合却つて其の藝術は習俗な人類を向上せしめるであらうが、自然に適つた作品を成さうと努むる事を止め、此の活きた物の解釋より外に其の目的を立て、專ら自己の技巧を顯はし、自己の想像力を示さうと考へ

る時には其と同時に美術の墮落が始まり滅亡が近づくのである。

自然は人を解釋者として其の美を發揮する。自然の美も人間の美も此解釋者なしには居られぬ。「人の力と自然の力と相俟つて、始めて優秀の美術と社會が存在するとはラスキンの主張であつた。」美が如何に人生を美化するか、藝術が如何に人心を善良に感化するか、是れは或意味に於いて純粹の美學乃至美術觀から見て第二義に入るべき問題だ。然し私共は社會とか道德とか、國民とか民族を離れて美術の價値を論ずる事は出來ない。ラスキンの言葉に

『The condition of life and death in the heart of nations are also the condition of life and death in your own.』

と有るのも全く美術家自身の生死の問題と國民の美術の生死の問題とに密接なる關係ある事を述べたものである。美術が自然の事物を解釋し表現する事を忘らぬ間はいつも生命を有し發展をする。美術の生命と發展とは常に國民の生命と發展とに伴ふ。

* * * * * * *

美術と奢侈――ラスキンの奢侈觀については先きに私は可成りに詳しく述べたつもりである。此處には唯ラスキンの美術論に現はれた奢侈觀につき述べて見たい。勿論是れがラスキンの美術に對する奢侈觀の全部でない事を斷つて置く。

ラスキンは人間の生活の源泉に三個あることを述べた。即ち第一は美しい衣服であり第二は潤澤な食物であり第三が藝術である。私は是れがラスキンの重要なる美術的經濟觀の一部であると信ずる。人間には質素にして清潔な生活が必要である。人間には出來るだけ健全な仕事と確實な善事とが必要である。同時にラスキンの力說する如く自分の蓄積したるものを全部費して了ふ可きである。

「What ever our station in life may be, at this crisis, those of us who mean to fulfil our duty ought first to spend all we can spare in doing all the sure good we can.」

是れは Sesame and Lilies 中の Mystery of life and its Arts 中にある有名の句である。財や美術の蓄積は一方に於いて善事であるが同時に罪惡である。美術の惡しき

意味の蓄積はラスキンに取つて奢侈であり同時に倫理上の罪惡である。

ラスキンによれば美術は本來裝飾的のものであつた。美術は裝飾的であり得べきものである。そして今日まで完成せられた最高の美術も裝飾的のものであつた。故に裝飾的の美術が劣等だとか裝飾的ならぬ美術が最高の美術であるとは言へぬ。たゞ美術が裝飾的である場合に奢侈の對象たる可きの Moral Crisis がある。コレジオがパルマの宮殿の第一層の裝飾すべき依托を受けたのも、チントレットがベニスの議事堂の廣間に裝飾したのも、全く偉大なる裝飾的美術が決して奢侈の對象たらざるを示すものである。自然の力を無視し物の場所と用途とが卑しければ卑しい程そのものゝ自然雅趣も減り低級な裝飾的美術の種々の形が現はれ、そこに美術上のラスキンの奢侈が現出さるるのである。ラスキンは英國の中世時代の美術的墮落を評して次の如く言つて居る。

『中世の華やかな美しい生活の目的はたゞ彼等貴族や上流の奢侈に誇らんとした反映に過ぎぬ。彼等の奢侈の生活は暴虐と掠奪とによつて營まれたものだ。その結果は美術そのものゝ滅亡を到來せしめた』

歴史は私共に色々の教訓を與へる。足利時代の美術も德川末期の美術も中世英國の美術も只上流社會の專横に維持され一般人民の滿足と慰安とは更らに度外視された。ラスキンの言葉に

『凡て勢力のある者は之れによつて種々の卑汚な所行と共に、美術の上に無用の粉飾を施すものである。美術はやがて驕慢を飾り肉欲と奢侈慾とを促す爲めに用ひらる』

只ラスキンは專ら今後の人類に取りてはマーブルの玉座も黄金の天井も要らない、吾々の美術の力と慰とを卑賤の人の到達し得るものにせん事を力說し過去の美術が其の一部分の社會に限られ奢侈の飾具たりしを嘆じて居る。

十九世紀の中葉は英國商工業の雄飛せる時代だつた。ラスキンが其の美術觀から經濟觀に移り行きし頃は實に鐵の効用時代である。自然の美は容赦なく破壞せられ而も是れを潤ほす可き美と善とが徒らに其の行く可き道を知らない。彼はつとに英國の將來について極端な忙しい生活を想像して慨然たるものがあつた。同時に伊太利の過去を回想して極端に華美と奢侈の生活を眼の前に描き、

もしも今英國民が、充分に彼等の善良な務を果たすならば、極忙の生活と、極美の生活との中庸に位すべき——勞役の爲めに疲れ果てもせず奢侈の爲めにも腐ちせぬ正しい目的と行爲と、正しい美術との共に具つた平和の生活が產れ出づる事を說いた。

* * * * * *

美術と經濟——私の選びし經濟的美術觀なる題目は此標題に最も密接なる關係を有するが、然し、此處に述ぶる美術と經濟なる語はラスキンの經濟的美術觀の重要且つ一少部分に過ぎない。ラスキンが如何に經濟學なるものを美術に應用せしかを研めたい爲めに改めて美術と經濟と標語したのである。

『聽衆者諸君中には普通の勞働問題に關係した經濟學なるものにはあまりに興味をもたれまい。だから如何に經濟學の原理を美術に應用するかと言ふ事をききたい人も澤山にあろふと思ふ』

是れは一八五七年ラスキンがマンチエスタァで試みた前後二回の講演中其の始めに叫んだ言葉である。Political Economy of Art と言ふは此の時の講演であつ

た。(文學士栗原古城氏の名譯あり又神人と題人と題する同氏の單行本中にラスキンの小傳あり)

ラスキンは此の論文に於いて、藝術に關する勞力を如何に適用し蓄積し、保存し、分配するかを經濟學的に考究し然も其の論旨は藝術に關する經濟學の根本原理を說いて居る。今私の淺學を以つてして是れを詳說するの要はない、『永久の歡こび』と題する栗原氏の全譯を購ふべきである。唯私の論文を完結したいが故に次に要譯を試みるであらう。

一、如何にして天才者を發見し得るや

吾人は如何なる手段で、天才を發見し、其一定の時間內に多量の有効なる藝術的知識を生產すべきか——ラスキンによれば第一に注意すべき事は、藝術家は每も發見せらるべきもので、作らるべきものではない。生れながら美術家は美術家たるの運命を有したもので、決して第一流の實業家や政治家にはなれぬものである。もしこゝに若き青年美術家があるなれば先づ適當に生活を維持して他から排斥せられず又自ら煩悶する事なく、自由に其の技倆の發輝するを得るの機會を與へ

てやらねばならぬ。

二、如何にして天才者を使用すべきや

此の點に關してラスキンは次の三點を掲けて居る。

【第一】青年美術家をして成るべく相異つた製作に從事せしむる事

【第二】容易い仕事に從事せしむる事

【第三】永續する仕事に從事せしむる事

この第三につきラスキンはずい分詳しく述べて居るが今是れを略する。

三、如何にして天才の努力になる藝術品を蓄積するや

美術品が多く蓄積せらるゝのが可いか惡るいかの問題と、如何にすれば澤山の美術品が得られるかと云ふ問題である。又ラスキンによれば或一定の程度以上に是れを廉價ならしめて澤山の蓄をしてはならないのである。美術に對する尊敬心は同種類の美術品に接すれば接する程減却するものである。此の意味に於いて、自分の所有して居る美術の價値を下落させまいと考ふる人に對しては逆に『美術は餘り高い直段をつくべきものでなく今日よりずつと廉くしなければな

らぬとラスキンは說き、チチアンやターナーの名畫を落葉の樣に弘く世間に頒布せんと欲する人に對してはこの反對を說いたのである。

然し中產階級の私人が自由に是れを所有して其の偉人を充分に翫賞する事の出來るものはたゞ書物のみであると言つた。ラスキンには大規模の美術館が多數に作らるゝ事が必要であつた。個人の致富が所藏する美術品と、美術館に所藏された公衆の爲めの美術品との間には其の蓄積上微妙なる調和が存在するのである。

美術保存の實行手段としてはラスキンは先づ第一に國家や私人が巨費を投じても尙ほ新たに美術を買入るゝの必要を說き第二に如何なる事情の下にあつても模寫せる美術を買ふ勿れ。模寫は罪惡であるとまで力說し、第三に新らしいものを生產するよりも寧ろ舊るいものを保存せよと主張して居る。

◎四、如何にして美術品を分配するや

此點についてのラスキンの說く所、最も詳細を極めて居るが故に、私の詳略は却つて無意味にして寧ろ毒するものであろう。

彼は美術品の分配を單に公有ばかりとはせず私有の價値を認めて居る。其理由は次の如くである。

【其一】美術館に保存する時、愚かなる管理人の失策と變災による全部滅亡の弊、

【其二】美術の私有は多數國民の家庭生活を利益し且つ其の美術を比較的正當な價格に低減し得る事

美術の私有には弊害も伴ふ、即ち美術家自身の營利心と貪慾を高かむるのみならず、私有者の射利心を引き起こすことである。然し是れは一種の附隨的弊害であつて是れが爲め美術の私有を禁すべきものではない。

* * * * * * *

眞正の美術——ラスキンの眞正の美術とは直に優秀なる美術の意味であり偉大なる美術の義である。美術家の立場から是れを論ずれば眞正の美術家は優秀にして偉大であることと當然である。

ラスキンによれば優秀なる美術の具ふべき要素に二つある。優大なる美術は此の兩者の統一によつて生れ出づ、即ち其の第一は事物の觀察(Ogservation of facts)

であり第二は其の事物の要求する當然の道によつて工夫と精力とを働らかせる事（Manifesting ob human design and authority in the way that fact is told）である。又彼はDouglas motto たる Tender and true を他の事業に於けると等しく美術の通有性として信奉せらるべき事を說いて居る。

現今の美術界は樣々の說と種々の利害關係によつて甚だしくコンプリケートして居る。何人でも美術につき談り書き又は興味を持つて居る。何人も美術を要求してゐる事實であり、秋の文展にさへ、猫もシヤクシも又自分の如き者すら、吾れ勝ちに目擊し批評したがる。然し靜かに考へればラスキンも云ふ如く『何人にも向く』と云ふ美術の存在は無い筈だ。然し眞正の美術の存在はあるべき筈であり、然も唯一種永く眞正の美術たるの要素を具備せねばなるまい。

眞正の美術と平凡な美術との差は何故に生ずるか、ラスキンに問へば

第一に其の感覺の鋭敏にして趣味の高雅なる事

第二に其の想像力の絕大なる事

第三に其の勤勉なる事

の三者と答ふるのであろふ。右の三項はすでに述べた如く優秀なる美術家として具ふべき必然性であつた。

◎一八五七年リオンに於いて建築學會、會員に對してラスキンの行つた講演中に建築家も亦凡ての美術家と等しくその眞正の美術家たる爲めには先づ第一に其の選びし道に對する愛を高調し、第二にその働いて居る所の世界を愛すべきを力說し、最後に其の交る所の凡ての知己を愛すべき事を說いて居る。

近世畫家論の第一卷にも記るされた如く、何百年となく讃嘆崇敬されて來た美術にはどこかほんとうに優れたものがなければならない。世間一般の人間の平的知力や平的感情に是れを見分くる力があつたからではなく美術其のものに價値があつたからである。

大詩人の作品は何時も普遍的である。普遍的とはそが個人の描寫を唱へないゐめではない。否寧ろ萬世を通じて同一な心を其底まで歌つてゐるからだ。詩人的藝術家たると繪畫的藝術家たるを問はず、凡そ其の道の眞の作家は全然其時代に住み、自らの最も秀れた作品は彼自身の時代を材料とする。ラスキンによれ

ば是は不變の法則であつた。十三世紀の伊太利を描いたダンテも、十四世紀の英國を描いたチョーサーも、十五世紀のフローレンスを描いたマサッチオも十世紀のベニスを描いたチントレットも彼等は皆あらゆるアナクロニズムや其他の小さい錯誤を仕ながらも尙ほ生きた現在から常に生き、普遍的の眞理を捉へて居ると言つて居る。

『The last characteristic of great art is that it must be inventive, that is, be produced by the imagination.』

Modern Panitor III. IV. 3.

* * * * * * *

1.

彼は美を談り
道を說いた。
彼は世に抗つた、
綠の山野に

鐵の煙を眺めて
彼は愛を讃美した。
命の外かに
生の外かに
富はなかつた

2.

愛を叫びて
愛を失ふ
南に涉らひ
北に遊ふ

(R. M. 作)

1922.2.10 出版

四、ラスキンの眞理福音

ラスキンにゴスペルありや否や、ラスキン學者は誰れしも考ふ可き問題である。彼を豫言者として見る者は無論の事、彼を批評家なりと論ずる者も等しく彼に眞理福音ありと說くは正當である。E. T. cook 氏の "The Gospel according to Ruskin" なる論文を見ても理解さるゝ如く彼に Gospel が皆無だとは言はれまい。彼は其博ろく深かき觀察をもつて吾等に新らしき思想表現の道を敎示したばかりでなく、新らしき思想の原野に坦々たる道を披らいて淸靜なる春の如き行爲の實現を表示した。嚴密でない Gospel according to Darwin=Gospel according to Ruskin なる私の方程式は他の學者の簡明なる言葉 There are Ruskinians as well as Darwinians と一般でなければならぬ。何事にも謙讓なるラスキンは晩年に曰ふ、

『多くの或る者は重要なる眞理の發見者として後世に名を傳へ又或る者は格段なる方則の創設者として其の名を用ひて後世に傳はる。然し私は何者も發見す可く自らを適はせなかつた、唯發見せられし者を讃美する事に滿足した。さ

れば私には所謂 Ruskinian として存立すべき何者もない』

誠に彼の言ふ所はゆかしいものである。然しジョージ、エリオットがその友サラ、ヘンネル孃に書いた如く

『あなたはラスキンの著作に注意されましたか？私は彼が近世の大敎育家である事を洞察した。彼はヘブライの豫言者のインスピレーションを持つて吾等に敎へる……』

又カーライルがエマーソンに書き送つた如く

『君はラスキンの Fors clavigera を讀まれしや、若しまだお讀みでなくば是非ともお讀み下さい。そしてこの後共彼が書くものを讀んで下さい、私共に是程注意をひきしものはありませんでした』

エリオットやカーライルの言ふ所は全くラスキン自身の思ふ所と異ふ、然しエリオットの彼を讃美せるはラスキンの敎、"Truth, Sincerity, and Nobleness" を指示するものであつた。勿論此の三つの言葉は彼が其の師カーライルより學べるものであつたがラスキンの價値はカーライルの未だタッチせざりし新らしい世界に應

用練磨して其の必要を實際に教示せる點にあつた。更らに彼の道を說くや其の思想上の經路に止まらず物質經濟上に美を說き、美術宗教の上に經濟と物質を適合せしめた。即ち Cook 氏によれば

(1) Ruskinian Gospel of Art

(11) Ruskinian Gospel, its leading application to political and Social Questions

の二者に分解して彼のゴスペルの價値が讃美せらる可きである。

* * * * * * *

美術上のラスキンの福音

此の題目によつて說かんとする彼のゴスペルは Cook 氏の "Studies in (Ruskin, 1890" の第一章の抄譯で、美術の原理に關するラスキン說の抄譯である。淺學の自分にはおこがましい事の樣に思つたが、良心の疊らざる限り、自らの修養と研究の爲め譯述して見た。心ある讀者はジョウジ、アレン社發行の原本を見られん事を希ふ。

(A) 美術の本質

美術とは何ぞや、又如何なる人間の本能より發現するか、又如何なる才能により夫れが表現さるゝか、又如何なる法則に支配せらるゝか、又美術は如何なる目的を有するか等の基礎的問題に對してラスキンの所說は簡略に次の如く言ふ。

『人間の就す美術は、彼自身其の一部たる創造の形式及び法則に於ける合理的、紀律ある喜悅(感激)の表現なり』

彼によれば Creation 無くば美術の存在なく、その創造に對する善意の Imitation 殊に感激と悅こび(Delight)に伴ふイミテーションより美術は產れるのである。

『小羊の遊べるあり、夫は全く生を樂しめり。されどこの小羊は美術家(藝術家)にあらず』

と言ふラスキンの言葉は、同時に小羊の樂しめるを眺めて石磐の上に其の樣をイミテートする小兒は美術家なりと言ふと全く同義である。此の小兒には感激がある、悅こびがあつた。さればこそ、その可愛いゝ小羊を描かんとしたものである。即彼の歷史的研究に現れた "All great Art is Praise" の格言はギリシヤの繪畫

が神の偉業を讃美せること又初期伊太利美術が神を讃美する聖者達ちを畫いたものこと全く同意義である。

ラスキンは言つた、彼の近世畫家論はその最初のシラブルより最後に至るまで唯完全にして永遠なる神の仕事の美の讃美であるこ。偉大なる美術は偉大なる思想を數多く保有するものである。彼の所謂 fivefold Ideas 又は Ideas of Power, Ideas of imitation, Ideas of truth, Ideas of beauty, Ideas of relation 又此の五者で何れも every thing productive of expression, sentiment, and character である。

(B) 尚き主題を撰擇するの義務

嘗てターナーはラスキンに一書を送つた、

『敬愛する友よ、上品な繪畫を畫く事の如何に難事であるかを御承知なれば、何ぞ夫れ等の畫家に對しては酷に上品々々こ言ふ勿れ』

然し此テクニク上のラスキンの批評にこつては苛酷の言であるかも知れないが主題撰擇上の彼の批評にあつては稍許るさるべきものであつた。彼は唯 Chaucer の "The life so short, the craft so long to learn" こ言ふ警句の如く彼等の勞して

獲たる熟練こ貴重なる時こを主題の善良なる撰別によつて waste する事なきを欲したのである。

近世畫家論の第三卷第四節の三に記述さるゝ如く偉大なる繪畫の第一要件は高尚なる題目の撰擇であつた。

1. Choice of Noble Subject
2. Love of Beauty
3. Sincerity
4. Invention

} Token of Greatness

ラスキンによれば偉大なる藝術の特色は第一に高尚な題目の選定こ言ふ事に現はれ、第二に美を愛するの心、第三に多量の誠實を含むこ言ふ事、第四に創見に富むこ言ふ事實に現はるのである。

私は今彼の福音を述べるに止めたい故に第二、第三、第四については詳述するの要を認めぬ、美を愛するに心こか誠實こか創見こか言ふ問題はラスキンによらずこも了解せらるゝ樣に思へるからである。然し高尚な題目の撰定こ言ふ事にな

れば『比較的ツマラヌものを題材とした時は偉大なる藝術は得られ無い』と言ふ事を聯想せしむる。

今此處に考ふ可きはラスキンの、この高尚なるべき題目の撰擇方法である、彼は次の如く言ふ。

A　撰擇方法は誠實でなければならぬ、例へばつまらぬ功名心から態と高尚なる題目を撰んだのでは其處にインスピレーションがない

B　其撰擇が賢明でなければならぬ、そして其の取扱ひ方に細心を要する……かくの如く絶ゆる事なく良き高尚なる題目を撰んで夫れが習慣性となる時畫家の心裡にも驚ろき興味と深遠なる感情が養はるとはラスキンの至言である。彼はレオナルドの Last Supper. ラファエルの School of Athens. ハントの Claudio and Isabella を例證して順次に (一)神聖の題目 (二)偉人の行動及び思想を題目とせる (三)日常生活の感情や出來事を描寫せるものに就き尚ほ斯の如き差異の生ずるを力說して The duty of choosing Noble subject を唱ふ。

C　美術上の眞と美

『偉大なる美術は最も完全なる可能的調和の中に、最も多くの可能的眞理を含まねばならぬ。出來得可くんば凡ての美術は自然の眞を全部保有すべきである。然し夫は出來ない事だ。……唯劣れる美術家は無益に散在せる眞實を把かみ、秀れたる者は最も必要とする眞實を握つて他に是れに附隨する從屬的必須の眞をも失はず』

彼はレンブランドを例證して此の The Sum of truth を把握するには Delicacy of Handling の必要を附說した。そして最後に偉大なる美術はデリィケートの作者にして粗野のものでないと言つて居る。All Great art is delicate art, and all coarse art is bad art. (M. P. III. IV. 3. 16, 20)

ラスキンが美術の眞實(眞實は眞理にして truth)を說いて其の美を閑却せざるは無論であつた。而も彼は其の美論に於いて一層讀者の感興をひいたのである。彼の受けた教養は特別のものであつた、從つて彼は特異の地位に育くまれ變つたインサイトを保有した。彼は Puritan であり同時に彼自身 Painter であつた。其の訓育は Evangelical であり而も其の嗜好は Catholic であつた。

E. T. Cook 氏の說によるとラスキンの美觀は美の客觀的存在を認めた,即ちObjective standard of beauty に歸するのである。ラスキンによれば美は宇宙の創造的スピリットの表象である。この說はプラトーによつても唱へられたが尙ほ一層明らかにスペンサーによつて說明される。

"That beauty is not, as fond men misdeem, An outward show of things, that only seem;"

美が宇宙のクリエイチブスピリットのエクスプレッションである以上,美は夫れ自體に存在する,從つて美の觀念には智力の直接の働らきがない理けである。ラスキンも無論是れを主張するが次の如く Intellectual Beauty を認めもする。

『私は美が智力に何等の影響を及ぼさないものであり智力と全然無關係だと云ふのではない。……高等な美の觀念にあつては其愉快と感ずる大部分が純然と知的な働らきに基因する事は當然の事で斯くの如き智覺により吾々普通智的美と稱し得る最高觀念に到達する……』

美の客觀的存在說はラスキンの創造說ではない,彼のゴスペルは美と德性とを說いた點にあると思ふ。彼によれば美の感は肉的でもなく知的でも無かつた。

美觀が人間の心に眞實切實ならん爲めには,人間の德性が純潔,公正,濶達の Condition になければならぬ,而もかく感じ得た美的事實を愈々智力が判別するに際しても其の判斷の善惡は夫に對する純感情の鋭敏さによつて定まるのだ。彼は更に言ふ。

『美に對して鋭敏な感性を持つ人が純潔な心で是れを受け容れない爲め却つて劣等なる欲望の奴隷となり遂にはその feeling and sence までが全く俗惡となつて救ふ可からざる肉の下僕となり下がることは往々見る所である』

思ふに凡ての人は感性を持つ然し此の感性に Associate して純良なる心を所有するや否やは別問題である,美其物は別個に存在する,聯想は喜悅の精因である,美も亦 Source of Pleasure だ。然しされば美は Association ではない,否美は

(1) in certain external qualities of bodies which are typical of Divine attributes

(2) in the appearance of felicitons fulfilment of function in Vital things

此の兩者の中に成立するものである,是れラスキンの標式(ティピカル)美と活力(ヴイタル)美である。

何故に靜けきものに美があるか夫れはラスキンに從へば Divine Performance の

一形式であるからだ、其處には普遍的本能の靜けさがあり內にも外にも謙やかな而も嚴かな靜寂が未來も過去も唯だ一つに融合して存在するからである。

何故に動ける雲雀は美しいか、夫れは烏類の理想を唯一つに表現するからだ、雲の上の小さい唱ひ手を聯想するからだ。何故に理想的偉人の顏は道を步む通常人の夫れよりも美であるか、其處に不斷の生命美があるからだ。

(要之、標式美には infinity, Unity, Repose, Symmetry, Purity の五要素があり、生命美には Relative Vital Beauty, Generic Ideal, Individual Vital Beauty の三項がある、一八九一年發行、コリンウッドの『ジョンラスキンの美學』第七章美論、一二五ページ參照)

『自然は美術よりも尙美なり』と言ふラスキンの言葉を信ずるならば、吾々の感觸し得る自然を研究する事は極めて重要且興味深かきものである。研究の題材として具さに自然の微細をありのまゝに觀察するならば、人間が自らの心に樣々に畫いて自然を美化する以上に美しい事を發見するであらう。吾等を驚異し感激せしむる自然には美術に見る事の出來ない眞の美がある。此の眞と誠とは其調動の上に於いて、デリケートな而かも力强よい點に於いて、美術家の冷靜なる心を

ひきつける。彼等の職務は是れ等の普遍的美と眞の事實を閑却する事なく更らに抽象化(アブストラクト)して具體化するのである。

"Beauty is truth, Truth Beauty" とはキーツの言葉であつた、美は誠なりと言ふ句はラスキンに取つて自然は美にして誠なりとの意味であつた。自然は誠である美も正直だ、唯是れを感觸する人間の心眼によつて變化する。近世畫家論の第四卷第五節の十一にも次の如き說明がある。

『最も美しいものゝ中に人間を置く事は宜ろしくないと信ず。何となれば人間は此の地上に於いて滿足を知らざる生物であるから。如何なる美の中に人間を置くとも彼はまもなく慣れ切つて不滿と倦忘を感ずるであらう。如何に美しい管弦樂も、一年中ぶつ續けに演奏さるゝなれば、音樂の享樂と理解は全く消失するに異いあるまい。』

美の客觀的存在は彼によつて肯定せられ、而も人の心の狀態の如何に必要なる事を述べる彼は美を說いて道を說くゴスペルの傳唱者であつた。——美と眞に就

いてのラスキンの考へは是れ以上にもつと細に亘つてゐる、讀書力に乏しき自分には是れで力一杯だと思へる。

D　美術と宗教

1. According to Ruskin, Art is Religion.

2. In the Gospel according to Ruskin, Art is not only Religion ; it is Marality also.

(Principle of Art. by E. T. Cook. P. 15—16)

トルストイは文藝から宗教に轉じて基督の無抵抗主義を唱へ、福音書の教義をそのまゝに人生に行はんとした。ラスキンも藝術の批評から自然の偉大さに打たれて、藝術に宗教を認めた。此の二人は同型の Prophet であつた。唯前者は後者よりも一層にユートピアンであつたに反しラスキンは經濟の現實を貴びしが故に經世家たるの宗教家であつた。科學的社會主義を奉ずる人々の目にはマルクスがブルードンを嘲評(大正十一年六月號解放小泉教授稿參照)せる如くラスキンもずい分物足らなく感ぜられるであらう。然しラスキンは決して因はれた精神主義者で無かつた。彼の中世藝術の研究はその時代の宗教的な純な魂を得るの

が目的であつた。

『國民の氣風の善惡は必らず其の藝術上に現はる』

とはラスキンの主張である。古代ギリシャの戰鬪的魂、ルネサンス後の伊太利の肉欲主義、タスカニーの永遠的宗教思想、ヴエニスの美しい人間的美的精神は其の例證である。彼は英國の山野を眺めて多くの新しい建築物を觀た。住宅、工場、寺院、學校、――寺院、學校は主としてゴシック式であり住宅、工場は全く他の樣式であつた。彼にとり斯くの如き現象は近代に限つたものと思へた。ゴシックの創設された時は住宅も工場も寺院も學校も凡てゴシックであつたらう。アントワープの寺院がゴシックならばブラッセルもブルッゲの町も一樣にゴシックであつた。(特に Crown of wild olive 參照)

『今日の英國人は或る建築樣式の下に住んで他の樣式の下に祈禱する、此は如何なる意味に解すべきであらうか』

思ふにラスキンの解釋は今日の英國民が宗教を其の日常生活から分離して全く『精神生活』や『純な心』や『完教的感情』を沒却したものと嘆じた。

次に掲ぐるはラスキンの Sesame and Lilies 中の第三講演(ダブリン市王立理科大學にて)人生の神秘と其の藝術、中の彼の言葉の抄譯であるが、是れによりても如何に彼が英國の第十九世紀文明を嫌つて科學の力を呪ひ自然の破壞を恐れて人爲的藝術より脫して大自然の藝術に入らん事を希望したかと理かる。

『私は私の强壯な十年間(二十歳の頃から三十歳の頃まで)を、レイノルド以後英國派の畫家中で最も偉大と信じた或る天才畫家の作物の紹介に努力した事がある。私は其の頃眞の美の力は何日かはきつと世に弘がり、効果と名譽の中に正しい地位を占むるものと確心して居た。夫れで此畫家の生存中に、何んとかして彼の仕事を其の地位にまで齎らさんと努めた。然し彼は私以上に世の人の理解なき限り如何程叫ぶとも無用である事をよく知つて居たから心に尙感謝しながらも屢々私を輕んじた。そして私の事業の効果が現はれないさきに死んで仕舞つた。だが私は此の仕事をつゞけた。畫家自身の爲めにならないまでも世の人の爲めになれば良いと思つたからである。

其後私の著書が追々に評判され、近代繪畫の價格も漸次に昇つて來た時、幸か

不幸か、私のひそかな喜こびは忽ちに壞されたのであつた。

其頃ナショナル、ギャレリーの評議員等が同館にあるターナーの作品を整理する樣委托され、又彼の習作三百點をケンシントン、ミユジアムに陳列する事を許されたのであつた。――然し其の繪畫のある部屋には何時も人が居なくつて、全く陳列しないも同義であつた。……悲しいかな、私の十年間の努力は全く水泡に歸したのだ。然し私は別に氣にも留めず尙ほこの研究に沒頭した。私は却つて學んだ、そして私の努力と知識を一層に有効に利用すべく心掛けた。斯くして最後に唯神意にかなつた最も美しい美術の天才すら無益に勞作せられ滅び行く事を發見したのである。然り、とても普通一般の人には誠の美の眞價は了解されない、この神の惠すらも夏の雪の如く、Harvest の雨の如く消滅するのである。……

私は自分の好む美術の流派(スクール)が(ブレラファライムやゴシックの建築の如き)かくも毒されるを見て自らに責務を感ずるのである。かくして私は鐵で固めた街や、水晶ではりつめた宮殿から逃れて the Carving of mountain and Colour of the

flower に驅け去つたのである。』

ラスキンの周圍は鐵と煙であつた。有名な水晶宮もラスキンの眼にはたゞ『鐵とガラス張り』と言ふ殺風景な建物であつた。靜かに美しい綠の山野も鐵と煙にまみれて英國の天地は精神的に黑ずんだ。ここに清澄と云ふ感が起こされたであらうか。

彼の自然論、美術觀が宗教と結合したのは無理ならぬ歸結であつた。

Art is Religion —— ラスキンの此書籍の分解は (Collingwood に從ふ)

(1) Art as viewed by Religion.

(2) Influence of Religion upon Art.

(3) Religions Art.

(4) Service of Art to Religion.

(5) Religion and Artist.

此五者に分つ事が出來る彼の福音は拙ない私の筆を持つてくどくどしく說明するの要がない。

美術は宗教也と言つたラスキンは同時に美術は道德であつた。此の思想の根源は心理的に美術の美術家に與ふる効果即ち彼の Effect of Art upon Artist から發するもので此の逆を考へれば美術家の morality が其の美術に與ふる Effect であつた。Art for Art's sake なるモットウは Art is the handmaid of Religion の反作用として生れたものだ。美術の爲の美術の存在、ラスキンとても否定は仕なかつた、又宗教の待女としての美術を肯定は仕無かつた。彼の考へしは美術の一般道德に附與するエフエクトであつた。"Art perfects Morality" は彼の福音であつた。同時に一般道德の美術に與ふる影響を史實に認めた。先きに書いた彼の『國民の氣風の善惡は必らず其の藝術の上に現はる』と言ふ金言は全く此の意味である。人の力と自然の力の調和が必要なる如く偉大なる美術の存在と健全なる道德宗教の調和とが必要であつた。美の爲めの美、藝術の爲めの藝術 —— 美學論より言へば或は第一義であるかも知れない、然しラスキンの福音は此の藝術至上主義乃至唯美主義から解脫せる點に在つた。

* * * * * * * *

政治經濟上のラスキンの福音

私は此の問題につきては先きに『ラスキンと經濟眼』と題して抄說した積りである。美術上に於ける彼の福音の價値にも勝れて、政治經濟上の福音は後學者の思考すべき問題である。何が政治上の福音であり、何がラスキンの經濟上の眞理であるかは直ちに淺學の自分に取つて斷定し得べきものでない、又ラスキン學者と雖も是れを明確に表示する事は出來まいと思ふ。河上教授の『アンツージス、ラストを讀む』と言ふ論文ですらラスキンの富についての福音を解說せられたに止まる。是れ等の價値ある長論文の結晶が始めてラスキンの眞理福音を傳ふるものである。

" All economy, whether of states, honseholds, or individuals, may be defined to be the art of managing labour. "……Political Economy of Arts, Lecture I.

" Toil the only Source of Wealth. "……The Two Path; V.

" To be 'Valuable' is 'to avail toward life' "

" Value is the life giving power of anything. "…… Unto this Last

(A) ラスキントと土地私有問題

Henry George (一八三九—一八九七)は土地の私有財産の目的たる事に反對した一人である。彼は土地の不平等を以て唯一の社會不平等の源因とした。彼は土地を以つて、全人民の共通財産と見做し、彼の所謂單稅論によつて、土地所有者の囊中に入るべき地代(レント)を、全人民の共同金庫に移さんと試みた。ラスキンの土地所有權に對する所論は、矢張り、一八六七年四月二十日の Time and Tide 即第二十二信第二十三信以下に叙述せられてあるが、彼の說く所又驚ろく可き程大膽にして、個人主義經濟學者に對して遠慮なき批判と攻擊を與へ、過渡期の經濟學者たるジョン、スチュアートミルですら、彼の爲めに手ひどく攻擊せられて居る。私が彼を社會主義者なりと思ふに至つたのは、此の土地所有論とセンド、ジョージ、ギルドの二者から想達したものである。

ラスキンは貴族社會を別ちて(一)地主及軍人(二)資本家及び商業家(三)科學、藝術文學等の專門家及名家、の三者としてゐる。そして之れ等三種の階級に對し當面の

問題として第一に起るは土地問題である事を力說し、土地分配の方法が如何にせらるべきかを論じてある。次に掲げるは其の要點であり、又土地分配上の困難なる問題とする點である。

(一) 土地分配の方法は其の人民の數に關係する事

(二) 土地問題の解決に當つて、大なる困難の生ずる事は、多くの改革家及び多數の貧民が『貧民に土地を與ふれば彼等の苦境は。直。ち。に救はれる』と過信する事である。

(一)に就いては、ラスキンは肝要なる土地問題は人口制限の問題と分離して取扱ふべきものなること、假令其の土地分配の方法が如何樣に完備するとも、人工增加より生ずる壓迫は來らざるを得ぬ事を述べて居る。故にラスキンは人口問題を別として土地分配の問題を論じ又實行し得らるゝものなる事を主張するのである。

(二)に於いては、ラスキンの人心改良必要說が現はれたものであり、彼としては直ちに土地分配により凡ての社會問題勞働問題が解決出來ぬ事を言ひ、他に是れを

補助すべき方法の存する事を主張するものである

本來、此の議論は、彼が一勞働者トーマスディクソンに送つた私信の上に述べたものであるが故に、極めて愼重に勞働者の土地分配に關する過信を抑へ抑へゆくのである

『是迄私が、君に述べた所は、各個人が各々其の力に應じて、靜かに是れを進めて行き、其個人的行爲の力によつて大成を期すべきである。土地分配を新たなる形式にする事により又上流社會の收入(地代の收入の如し)を制限することによる實行は孰れも重大なる、何等かの國內の爭鬪を惹起することなしには、到底すまされぬものである』。

更らにラスキンは個人主義的經濟學理論の非を說き地代に關する舊經濟學派の主張を攻擊した。

"In the writings of the vulgar economists, nothing more excites my indignation than the subterfuges by which they endeavour to accommodate their pseu-do-sience to the existing abuses of wealth, by disguising the true nature of rent."

ラスキンに取り地代は其の如何なる種類のものを問はず、他人の財産を借りるについて、連續的に支拂ふ價であつた。故に或事情の如何によつては其の額が少なき事もあり、程のよいものもあり又法外に高いものもある。此の法外に高いレントは唯獨り無知な者、又は必要缺くべからざるものを借りて居る人に對してのみ是れを强要する事の出來るものである。だから斯くの如き强要を制止する爲めに明白な法律を設定する事は國家經濟上の最も缺くべからざる措置であつた。彼のなす說は、極めて穩當ではあるが實例を以つてジョンスチュアートミルの所論に反駁するの如き、彼の主張が社會主義的化せるを證するものである。特に彼が社會主義者なりと言ふ一證は

ラ、キンが(一)人間の身體　(二)土地　(三)水　(四)空氣等を以つて全く是認すべからざるレントの主體であると言つて居る。

"Next, of wholly unjustifiable rents, these are for things which are e not, and which it is criminal to concider as, personal or exchangeable property. Bodies of men, land, water, and air, are the principal of these things."

私はセンドジョージ商社に就いて述べたる時ラスキンの人生に對する必須三有形物として空氣、水、土をあげ又土地上の勞働を離れて人生に幸福の存在せざる事を書いた。ラスキンは常に土地(レンド)を以つて神の啓らき賜ふた福祉として、私人の勝手に處理することの出來ない、大切のものなる事を切言して居るが、彼は此處に至つて、

『人は己の妻(人間の肉體)を賣買し得ざる如く、土地の賣買を禁じなくてはならぬ』

ことを主張して居る。

彼は私人が土地の使用を禁じたのでは無く、夫が妻を所有する如く或一定の期間、或土地の使用を許可するのである。然らばラスキンの、土地に對して國家の採るべき正當の措置は如何？

(一)其の國民中の信用し得べき人々に對して、夫々の希望と才能に應じて其の土地の各部分を領せしめ、國家が法律を設けて之を監督する事

(二)土地を國家より借用せる人々は、其の土地を賃貸して收入を擧げ、亦地代を徵收するが如きは嚴禁する事

(三)土地を借用せる者の收入は一定の額を定めて國家より是を支拂ふべき事

(四)殘餘の土地は假令如何なる費用を要するとも、是れをして最も幸福なる田園生活の模範たる完全の農耕地たらしむ事

註、ラスキンのユートピアは此點でも明白に察知する事が出來る。彼は農耕に於いては一切の機械力を排斥して、人蓄の力、或は直接の自然力を以つて使用すべき機械の外は一切是れを排したのである。

(五)土地を借用せる者(貴族等)の心身を使役する業務に就いては、國家は是れに一定の收入を拂ふべき事

以上を以つて私はラスキンの土地私有に關する態度を略說明したつもりである彼は更らに理論上から、ミルとヘンリイフォセットの學說に對して、遠慮なき反論を加ふる事凡そ數ページに亘つて居る。(第二十三信後半)

私は今斯くの如き案が果して實行せらるゝや否やについて云々するの餘裕と、知識を缺く事を心に耻づるものであるが、理想論として將、實際論として土地國有の說は眞理なりと云ふ經濟學上の大勢より是を見れば、ラスキンが從來の資本家

乃至貴族を直ちに〇〇〇〇に歸する事なく、彼等の地位と經驗を利用する點に於いて最も妙味ある實行方法ではあるまいか。殊に英國には彼の Land Lord の如き大地主が多いから、我國の如き狀體とは、少しく想を換へて、論及すべき問題であろふと思ふ。

* * * * * * * *

(B) 階級鬪爭とラスキン

ラスキンは或意味の精神主義者である。左傾にある評論家は彼を目してお人よしの改良論者と冷笑するかも知れない。

マルクスは言ふまでもなく勞働者の境遇が改善せられ得べきものでない事、其の地位は遞下する事があるとも決して進步するの餘地なきことを論じて彼の社會主義の實行勞働運動の急進的必要を說いたのである。此の點につきラスキンは樂觀論者であり漸進主義者であつた。私は今ベルンスタインの言葉をかり、或雜誌にて私がかつて讀んだその學說の一部を揭げ、ラスキンとマルクスの爭點の一批判となしたい。夫れは恰もベルスタインがマルクスの說の誤謬を指摘する點

に於いて私の爲めラスキンを辨解して呉れる樣に感ぜられたからである。即ち彼は科學的社會主義の中に生れて科學的社會主義を排して居るのである。マルクス及びエンゲルスの門下で、殊にエンゲルスが知力方面の傳承者たるベルンスタインは、却つて先師の學說に向つて遠慮會釋もなく非難攻擊を加へた。熱心なるマルクス派の論客は皆彼を怒りて背敎者を以て之を目した。彼は是れにつきてその間の消息を洩して曰く、『これ余が勞働者の位地を以て策の施すべきなしと云はざりければなり。これ余が彼等の境遇を改善するの可能なるを認承したるが爲めなり。これプレハノフ(Plekhanoff)なごが余を以て斷然科學的社會主義ならずとなせし所以なり。勞働者の境遇を以て策の施すべきなしと云ふことは五十年以前よりの仕來りの習慣なり、一八三〇年より一八五〇年に至る急進的社會主義の文學には此語は幾度となく繰返され、世人は其多くを理りなりとなし來りたり。マルクスは其『哲學の困窮』の中にて勞働者の生活の最低限費用は彼の自然的給料をなすと云へる所以の理は、是に依りて明かなりと云ふべし。共產黨の綱領を起草せし人々が、近代職工の境遇が產業の進歩と共に昂上する所か却つて次

第に遇下することを公言したるも之が爲めなり。彼等曰く、貧困は人口及び富よりも急激に發展すと、斯かれば勞働者の位地の助けなしと云ふこと是科學的社會主義の一定不變の公式なりき。』

一九〇三年、ベルンスタインは『社會主義と科學』(Socialisme et Science)なる一小著を公にして、公然マルクスの學說が主張する科學的性質なるものを否認した。彼曰く『剩餘價格の說を以て社會主義の科學なりとする彼の考は、已に打ち破られたり』と。彼はエンゲルスとマルクスとが共產主義に突込みたる論鋒に誤あることを發見し、今や破產の狀態に在るは、共產主義其者よりも、寧ろ社會主義が採れる色々の公式にあるを指示して曰く、『問題は資本制度の終極が破壞的なるべきか此破壞が近き將來に於て到來すべきか、是よりして社會主義を喚起せざるべからざるかを發見するにあり。是等の問題に對して社會主義者の與へたる解答は種々雜多なり。余は今ラッサルが作りたる公式『賃銀の鐵法』を此に選び來りて之を調査せん。思ふに經濟上の理論にして此說の如く爾く深くして固き信用を博せし者は之なからん。此法は斯くて永く勞働運動の標榜となれり。主義に殉する勇

士に英氣づくるの旗幟なりき。然るに今や時來れり。此法が法に非ず、何等科學的の根據を有するにあらざれば、當然吾人の綱領の中より抹消せられざるべからずと決せらるゝの時到れり。社會主義者の中には多くの紛議なくして、直ちに此新說に歸依するに至りし者亦尠からず。鐵法なるもの亦何人も之を口にすることなきに至らんとす。次に吾人をして他の公式を取らしめよ、そは賃錢取りの經濟上の境遇が日に々々惡くなり行き、次第に見捨て難き有樣に陷るべし(資本家の發展に比較しては)てふ說なり。之を貧困說 (Verelendungstheorie.) と云ふ。これ亦一時は弘く行はれて科學的の固き基礎を有するものゝ如くに思はれたり。共産黨の綱領中には此說の鼓吹する所となりたる語句少からず。過ぐる三十年間に社會主義者が刊行せし多くの出版物の中にも亦此種の說を見ること屢々なり。されど今日に於ては已に陳腐なり。斯かる種類の說にして往時は科學的の立脚地を有するものゝ如くに思ひ做されたれども、今は誤謬又は一局面の眞理を表明するに過ぎざる者とせらるゝ者尠からず。工業及び農業の發展の並行說の如き資本家の數の次第に減少すると云ふ說の如き機械の爲めに凡ての種類の事業が

均一せらるゝに至るべしと云ふ考の如き是なり。』

ベルンスタインは、尙問を起して云つた。『科學的社會主義なるものにして果して可能たり、否必須なりとせば、社會主義と科學との間に如何なる關係か存せる』と。彼は此問題を解析して又もや何等の關係も兩間に存せざるの結論に達した。曰く、『社會主義が科學的なりと云はゞ、そは社會主義の希望、要求、及び根基とする理論の正しと云ふだけの事なるべし。社會主義の運動は即ち此理論の研究の對象たり。此理論が社會主義の運動を理解し、之に說明を加へ、之に武器を供するなり。されど社會的の運動其者の明白に科學的なる者にあらざるは夫れ猶獨逸の百姓一揆や佛國革命や其他の史上の紛亂の科學的ならざるが如し。科學として の社會主義は吾人の知識慾を充足す。されど動力としての社會主義は然らず、唯吾人の感興を充足するのみ。知識慾を表はす科學と凡ての經濟的政治的利害感興との間には非常の違ひあり。二つの者は全く相反する者なり』と。

以上を以つてベルンスタインの全部の說と思つては大なる謬りである。私は唯彼の言葉の中から(一)科學的社會主義を排した點、(二)勞働者の地位の改善が可

能なる事を引き出して、凡ての社會運動、社會改善運動に、狹義の勞働運動のみでなく精神運動(近か頃流行した文化主義的運動の如き)の必要ある事を裏書きしたに止める。殊にラスキンの說く所、此の精神運動なるものを要素として多量に含んで居たからである。

此處に亦聯想さるゝはトルストイである。彼は極端な唯心主義者であつた。精神生活の改革を、あまりに過信した結果『闇に輝く光』の中にボリスをして『吾々は虛僞を排し眞理を弘める事によつて國家を破壞する』と言はしめる。

マルクスは外部生活、經濟生活の改革を過信した結果、また極端な唯物主義に陷つた。彼は共產主義の理想社會では宗敎は全く消滅すると言ひ、共產黨宣言では一切の過去の宗敎道德を破壞すると言つた。

之れを要するにマルクスは自然科學の價値を過信し、社會改良には科學的療治が必要だと言つた。トルストイは反對に心的改革を過信した故に、社會改良は精神的療法に重きを置かねばならぬと說いた。

今私はラスキンを過信する事によりて、ラスキンが物、心の偉大なる調節者であり、彼れの態度が、今日尙ほ讃美すべきものなる事を嬉れしく思ふ。

(C) ラスキンとセントジョージギルド

私は此處にラスキンが社會改良家としての實行家であつた事、そして彼はたゞの空論家で無かつた事につき少しく述べて見たい。

私は此の所に、特にラスキンの賃金に關する彼の思想を少しく紹介したつもりである、ラスキンの賃金論と此のセントジョージ商社に、何だか因果關係のある如く述べて仕舞つた事は、自分としてもあまりに勝手すぎる樣に思つたが、事の順序から此の二者を連結した事は、自分として誠に自然なもので、決して奇を好んで論じたものではない。ラスキンの勞働問題を語らず直ちにセントジョージギルドに入る事は私として出來ないからである。然らばラスキンは何が故に、慈善を口にするのみでは滿足せず、自ら財を之れに投じて、父の遺產百五十萬圓を殆んど蕩盡して、あの St. George guild を設立したか。種々の理由もあろうが私は此處に多少の動機ともなるべきものを上げ得る事を悅ろこびたい。

それは言ふまでもなく彼の社會改良家としての傾向が一層濃厚熱烈になつて、

稍や社會主義的色彩を帶びて來た事實である。(此の社會主義の意味は極めて範圍のひろきものであつて例へばオーエンの空想的社會主義、キングスレイの基督教社會主義等をも含む)其の始め一八六七年二月四日のトーマス・デイクソンに與へた所信に現れたラスキンの勞資問題に對する思想乃至解決方法は極めて溫和のものであつた。即ち

『利益を總ての人々に正しい割合を以つて分配する新制度と、勞働者が勞働市場の競爭の壓迫の下に、少額の給料を拂はれる現在の制度との間には、何も外かに代るべき制度は無いものゝ樣に考へらるゝ……併しながら此の中間の制度は考へ得らるゝのである。』ッ。

a system in which profits shall be divided in the proportion among all; and the present one, in which the workman is paid the least wages he will take, under the press of competition in the labour-market ……

But an intermediate method is conceivable.

彼はかく言つて『定期的に捧給を支拂ふと言ふ主義が抽象的に見て、正當であ

ろうが無かろうが、何の道一層賢明なものである』と斷言して居る。

I think this principle of regular wage-paying, whether it be in the abstruct more just or not, is at all events the more prudent.

かくの如きは、實に過激なる社會主義者の目から見ればあまりに穩健なる改善策であつた。然し一八七一年彼の母が死んでからは彼の方策が凡ての點に於いて一層實行的となり又急進的となつたのである。

理論として是れを述べて居る間は比較的容易である。けれどもいよいよ實行となれば、その間に想はざる困難が生ずる。ラスキンは自叙傳(プレテリタ)に言ふ如く、『過去二十年間、思索の產物』が始めて此のセントジョージ商社であつた。彼れが勞資調定の爲め案出した、定期的賃銀(比較的期間の長き賃銀)を與へる事の如き一八七一年頃のラスキンにはもう一種の過去の政策に屬した。私は先きに賃銀基金論の愚を論じた。今再び必要を感じたから英國の賃銀史の一ページを略說して、ラスキンのセントジョージ商社を論ずるの背景(バック)としたい。そして所謂ギルドなるものゝ經濟的價値を述べたいのである。

英國に於ける初期の勞働運動は極めて穩健に發達して來た。勞働者の最初の團結的勢力は職工組合であつたが、現代の如く社會組織そのものを變更せんとする如き爭鬪的のものでなく、誠に微溫的なものであつた。然し佛國革命に懼を抱いた一七九五年頃の英國では、賃金を引上ぐる更りに彼の珍妙なる法律 allowance act が發布せられた。然し此の樣な消極的の方法では物價の騰貴に對してさても滿足な賃金の增加を希望する事が出來ず、當時の英國勞働者の狀態は實に悲慘であつたと、一八一三年頃のアーサー・ヤングの報告書に示されてある。一八二四年遂に勞働組合が出現して、やつと勞働賃銀が物價と一致する樣になつて來た。かくの如く勞働者の組織が進捗して色々の組合が出來ると共に一方に於いては資本家、事業家の組合も亦益々盛に行はれ自他仲裁調停によつて兩者間の紛爭を決する事が必要となつて來たのである。現時の日本も亦極めて之れに類似した點が少なくない。然しかゝる場合の仲裁調停の機關は矢張り依然として資本家保護の立場にあつた。殊に個人主義經濟學の根本理論から育くまれた前述の賃銀基金論は、從令職工組合の運動によりて實際賃銀の騰貴する事があつても、矢張

り資本家等をして從來の賃銀を保持せしむるに充分の力があつた。勞働者は呪つた。經濟學なるものを呪つたのである。

誠然し今日の經濟學なるものは決して彼等が呪ふべきではない。經濟學は最早富者の權勢擴張の器械ではない。貧民の窮乏を助長せしむるの道具ではない。經濟學が一科學である以上は、人類が是れによつて富を生產し分配する所の法則を說明仕樣とする所の學問である。夫れも徒らに過去若くは將來の人間を說くのでは無い。現在の社會に於ける現在の人間が富を生產し分配する所の法則を說くのである。亦經濟學は理論科學としては此等の法則の是非を論ずるものではない。又勞働者及び雇主資本家の行爲に對して正邪の判決を下すものでもない。併しながら應用科學としては經濟學は人間を指導すべき敎訓を作り格言を作るのである。此の敎訓格言は單に資本家雇主の利益の爲めにするのではなく又勞働者の利益の爲めに專ら存在するのでもなく、社會全體の人民の利益を計る爲めに存在するものである。

アダムスミスの國富論とワットの蒸氣機關は英國產業上の大革命を惹き起こ

して舊社會を破つて新社會を現出せしめた事につき再び詳しく述べる必要もないが、此の結果は大工業の發達と、勞働者の悲慘なる狀態を生じて、あのカーライルをして其『過去及び現在』に次の如く嘆ぜせしめた。

『我英國は金が澤山だ。產物も澤山だ。人間の入用品は悉く具つてる。けれども我英國は營養不良の爲めに死にかゝつて居る。』

カーライルの所謂營養不良とは當時の勞働問題の不健全を指摘したものであつた。彼は勞働者も資本家も其のお互ひの間に必要な連鎖を忘却して、落ちつきのないWant of permanenceの社會の現狀を恐れた。Cash paymentによる勞働者と雇主間の冷たい關係はいよ〳〵階級鬪爭の色彩を濃厚にした。斯うなつては資本家も勞働者も互ひに主張するのみで、仲々に讓らない。Time and Tideの時。と潮。が書かれた時は(一八六七年の二月から四月)實に勞働者の革新運動が盛んに行はれた頃である。そして一八六七年と言へば、英國勞働者が參政權を獲得する事の出來た年で、四年の後には遂に職工組合が法律上の認許を得た、英國公民權の歷史上に於ける最も重大なる時期であつた。かゝる時ラスキンは『我國の勞

働階級に對して一顧を乞ひたい』と叫んで更らに彼等の內面的改善を要求した。

ラスキンは時と潮の序文に次の如く書いた。

『諸君の欲する改革は、諸君の努力を、その議會に於いて一層擴張するであろう。然し諸君の獲得した折角の力も、諸君がもしも議會に於いて何を求むべきかと云ふ決心に賢明なる判斷を缺いた場合、夫れはたゞ無用になつて仕舞ふばかりでなく恐らく却つて有害な結果を引起こすであろう。然し諸君が立派に決心を確めた時には、議會の援けは不用となり、却つて諸君自ら夫れを行ひ得るのみならず諸君自體でなければ他に何人も夫れを爲すことの出來ないものである事を悟るであろう。』

思ふにラスキンは勞働者に向つて其從屬的地位から脫して精神的の解放を叫んだものであつた。然し彼の叫びが勞資間の仲裁的のものであつた事は前述の如くである。ヘルマンゴルテルは唯物史觀の立場から勞働者の精神的解脫——即ち資本階級に對する勞働者の哲學上の思想戰を勸說したが、ラスキンは、階級鬪爭の現實は見ながらも、尙倫理道德藝術の上から溫和なる勞働者の自主的解放を求

めたのであつた。ラスキンは勞働者が、議會に立つ前に知つて置かねばならぬ事又準備せねばならぬ事の多量を暗示して彼等に反省を求めたのがある。ラスキンは常に自らを勞働者の先輩として彼等を敎導した。然らば何故にラスキンがセントジョージギルドを實行したか。私は此の問題を解するに、彼が勞働者の自主的地位を作つて、自主的世界に敎導せんとするの典型を指示せんが爲めであつたと斷言したいのである。今日の勞働者不安とか、勞資不安定とかの問題は何故に起るか。私は今夫れを勞賃制度の弊害に見出すのである。勞働者はどこまでも高く賃金を要求して良いか理らず、從つて彼等の要求が不安定である以上賃銀制度なるものは永遠に勞働者にも亦資本家にも不安を與へるものである。

私の家に附屬する工場が二つある。そして是れに從事する勞働者は東京に二百人と故鄕に凡そ三百人とがある。東京の工場は云ふまでもなく賃銀制度であるが故鄕では月給制度と日給制度とを取つて居る。今是れについて考へて見るに、假りに自分が父の死と共に、小さき工場主となつた場合、如何に工場を經營するか——私は主人側として考へて見て矢張り不安定な賃銀制度では自分の總ての

生活が安固でないと思ふ。此の點は職工や場員側からも矢張り同じ事でなければならぬ。私は此處で大きい理想——夫れは空想と言つて笑はれるかも知れないが——を心に浮べて見た。夫れは外でもない如何にして賃銀制度を廢めて是れに更るべき新らしき可能の制度を實行するかであつた。私は色々の經濟書を讀んだけれど是れに適應する答へは殆んど無かつた。唯ラスキンが定期的に俸給を支拂ふと云ふ主義に就いて述べて居るのを讀んだ事のみであつた。私は今私の學生時代に集めた賃銀制度廢止論に關するノートを整理する事により三つの案を左に揭ぐるであろう。即ちその第一は今日の資本主義の經濟制度をそのまゝにして置いて、勞働者の日給制を廢止し、賃銀を月給或は年給にし之に利益配分を附加することである。この案は今日の不安定な勞働者生活に勝ること實に多大である。その爲めに或種の救濟制度は生活が保證される爲めに不必要となる。然し實を云へばこの制度は勞働者と資本家との關係を封建時代の昔に返すので有つて、今日でも信州の生絲工場の職工は一年分前借で雇れて來て居る。又今日日本の農場勞働者の給料は年給である。然しその生活が從屬的であること

には少しも變りは無い。それで、今日の月給制度も、年給制度も全く理想的のものでないのである。

然らば、凡ての資本を國有にした、勞働者が、政府直屬の軍隊の樣なものになればどうであらうか？そこには勞力の浪費も無く競爭も無く、完全な機械的調和が行はれて居るのである然らばそこに賃銀制度は全く無くなるかと云へば、そうではないのである。勞働者は國家の奴隷の如くなる爲めに、一種の傭兵の如く一種の賃銀を受けるのである。そしてこの思想を以て居るのが、英國の社會主義の中堅ファビアン、ソサイエチーの人々の如きがそれである。『ファビアン、ソサイエチーに關する報告』(Repoct on Fabian Society1896)に於て、同協會は次の樣なことを宣言して居る。

『賃銀制度の撤廢と云ふ樣なことは、反つて社會主義に對して誤解を招かすものである。社會主義は、賃銀の廢止を意味せず、反つてその勞力に對する標準賃銀の維持と設定を要求するものである……即ちファビアン、ソサイエチーは賃銀制度を廢止する所か、反つて、凡ての人々に之を保證するものである。』

即ち之を見ても、社會主義國家は、生產者と國家との從屬的關係を賃銀制度によつて繫がんとして居ることがわかると思ふ。もし總ての人がこの軍隊的訓練を甘受し得るならば兎も角も、自我自主の解放を遂げんとして、反つて、官僚的執政官の意に從つて凡てのことを決行せねばならぬものであれば、實に厄介なものであると云はねばならぬ。

だから最後に殘つて居る解決は、中世に歐洲で行はれた、ギルドの形式を、も一度新しい形で現代に復活させ進化させて、生產者の全人、全性、全靈の享樂を生產ギルドそのものゝ中に發見することである。ギエルケが云ふて居る通りに、『古代ゲルマンのギルドは全人の生活を包含して居た。そして總ての人間の欲望を滿足さゝんとしたものである。それは今日の勞働組合の樣なもので有つたが、それと同時に、宗教的、道德的、社會的、經濟的、政治的、目的に副ふたもの』であつた。

今日の複雜な社會組織にこの種の包含的なギルドは組織し得ないにしても、國家的な產業ギルドを勞働者が自主的に支配し得る位は決して困難なことではないのである。そうして、工場經營が自主的となれば損失が無いとは限ら無いが、そ

の變り資本家に對する從屬的關係は之で無くなる。それを資本家だけが一人損すればそれで可いと云ふ樣な我儘なことを云ふなれば、勞働者も賃銀で滿足して居れ、それで勞働者が困れば仕方が無いと云はれるのである。

勞働者が、工場と產業と自主的に經營する樣になれば、生產の分配は誰れがするかと云へば、それは、消費組合を消費者議會ですれば可いのである。生產者議會と消費組合が、生產者の生活を保證する以上、それから先の生產そのものに對する享樂はギルドの形式の外に取る道は無いのである。

即ち、賃銀の爲めに働くのでは無くして、働くことが悅びであると云ふことを經濟に取り入れるには、ギルドの形體を以つて、勞働者を解放するより外に道は無いのである。ラスキンもここまで考へたのではあるまいかと私は思ふ。

勞働が賃銀の爲めで無く、崇物的精神から出たのでは無く、創造そのものにあると云ふこと『生來働くことが悅び』に自覺されてくる程、社會的に悅びは無いのである。そしてこの時に勞働者の解放は完いのである。

私は以上述べたる所に依つて、漸く略ぼラスキンの St George's Guild, の經濟的價

値を推定し得た。次に其の內容に就いて述ぶるであらう。

一八七一年五月一日の "Fors clavigera" に the most important philan-thropic works (Sarah. K. Bolton 氏の評)の主旨が發表せられた。その設立の目的は(一)に實際的宗教の無い文明は存在せざる事(二)に土地上の勞働を離れて人類の繁榮を希望し得ざる事(三)に正直と眞實のない幸福のあり得べからざる事、此の三個の眞理を世人に現實に證明せんが爲めであつた。かくてラスキンは一八七一年五月同志の地主、小作人、勞働者を集め自ら七萬圓を出資し他の社員にも出資せしめて、此のギルド式社會主義的小國家を設立せんとしたのである。彼は次の如く言つて居る。

『We will try to make some small piece of English ground beautiful, peaceful, and fruitful……

吾人は其處に一つの機關車をも、將た一つの鐵道をも要ら無い。此の土地には日的なき思慮なき (untended or unthought of creature) 人間の住む事を欲しない。此處には疾病と死亡との外不幸も懶惰もない、そして轉住の必要があれば我等は平穩に是れをする事が出來る。吾等の生命を賭して一時間に四十哩を走らんとするは不可能だ。けれども吾々は平和に家蓄の背か、自らの背か、又は舟車の便を藉つて

是れを運ぶ事が出來る。我等の花園には凡ゆる花果と蔬菜とがある。田畑にも限りなき穀物がある。吾等は其處に妙へなる音樂と詩歌を持つ。小供等は夫れに寄つて舞ひ老ひたるものも亦歌ふであろう。此の社會の目的は to buy land in England, and thereon to train into the healthiest and most refined life possible, as many Englishmen, Englishwomen, and English children, as the land we possess can maintain in comfort……」

やれ賃銀制度とか雇傭契約とかむつかしき事のないラスキンの此の文を讀んで私は彼が最も勞働と土地を重ずる者である事を知つた。勞働は個人の問題である、同時に一家族、一町村の問題だ。一團體を單位として勞働の神聖を想ふラスキンの態度は合理的である。私は讀み行くまゝに、かくの如き天國が日本にあつたらばと思ひ、近か頃企てられた武者小路氏の新らしき村に心よりの敬意を表したそして人的要素の如何に依つては決して不可能事でない事、又永遠性のあるべきを想つた。

一八七七年ラスキンのギルドはともかく Sheffield の近郊、十三エーカーの土地を求めてラスキンは "Guild master" になつた。金錢又は土地の寄附をせし者は

"Companions" と謂はれ、小作人又は勞働者を retainer と呼んだ。農業上に於いてラスキンのギルドは彼の所謂人生必須の三有形物たる、新鮮の空氣、水、肥沃なる土地とを男女凡ての人間に與へんとするものであつた。そして工業上、藝術上に於ても人類の現世的幸福を指示せんとしたものである。

家内に於ける工業は、ラスキンの大資本的工業に對する一の皮肉であつて彼は手工、紡績、機織、レース編み、木板彫刻、金物細工、リンネルの手製等を奬勵した。

美術の方面に於いては、Sheffield にラスキン博物館を作り人心の改造と向上に資する事多く、之れは彼の事業中最も社會的に成功したものである。彼は自家用の美術品と金員を醵出した。今日でも殘つて居るのは此の博物館で今は Sheffield 市の管理の下に保存されて居る。

然らば何人が此のギルドに入社し、如何なる方法で其のメンバーとなるか。試みに三四の條款をかゝげて社員が署名せねばならぬ事項を掲げて見る。

(一)我は天地及び見ゆる物、見えざる物、一切の造り主なる全知全能の活ける父なる神を信ず。

I trustin the Living God, Father almighty, Maker of heaven and earth, of all things and creatures, Visible and in Visible

(二)我は又神法の仁慈と神業の善良なる事を信ずる故に常に彼を愛し彼の法を守りて、我が生ける間努めて其の御業を觀んことを期すべし。

I will strive to Save Him and keep His Law, and see His Work, while I live.

(三)我は人性の高尚なる事、其能力の博大なる事、慈悲に充てる事、愛の悅樂に滿つる事を信ずる故に、我の如く亦隣人を愛し、我の能はざる時にすらもなし能ふが如くに努力すべし。

I trust in the nobleness of human nature, in the majesty of its fullulties, the Fullness of its mercy, and joy of its love, and I will strive to lore my neighbor as myself, and even when I can not, will act as if I did."

(四)我は、自らの日常の食物を獲んがために、神より受けたるだけの力と機會とを利用して勞働すべし、而して我がなさんと欲したる總ては全力全心を竭して之れを成し遂げん事を期す。

I will labor with such strength and opportunity as God gives me;

(五)我は自らの利益と快樂の爲め、人を欺き又人より欺かるゝが如き原因を作らざるべし。

Not to deceive, or cause to be deceived, any human being for my gain or pleasure.

(六)要なくして生ける者を殺ろし又は傷ふ事なく美麗なる事物を破壞する事なかるべし。

Not to kill nor hurt any living creatur needlessly, nor to destroy any beautiful things.

以上の外か社員は自分の心身を發展して愈々高き義務と幸福とに盡力し而も他人との競爭は出來る丈け是れを避けて自他の名譽を重んじ、己れ一身の平和と歡喜とを求めん事を署名し或は又彼等が神の法則に抵觸せざる限り忠實に社法を遵守し、萬一社法が神の法則と合一せず、何れかに變更の必要が生じた時、社員は飽くまでも公明誠實に決して陰險不穩當の手段を取らざる事を期し署名するのであつた。

ラスキンのギルドは、當時の英國の勞働運動の目的が、主として賃銀の高下と、政

治的特權を得んとするにあつた事に反對する形の狀態にあつた。彼はギルドの創作によつて英國勞働運動の缺陷を指摘し、其の充足を提供して居るものと言つて過言ではない。然るに最近の英國勞働界に勞働運動の一光明を與へたものはかの National Guild である。今私は此のギルドに就いて評論するに充分なる力を持たぬけれど、ともかくラスキンのギルドの出現と此のナショナル、ギルドの存在とは相對照して考へ見るに興味ある問題である。

何となれば此のナショナル、ギルド主張者は從來英國の勞働運動の目的が單に雇傭條件の維持及び改良にありたる事の誤を指摘して居るからである。今日の勞働運動は單に賃銀の增加、勞働時間の短縮等に依つて生ずる。物質的餘裕が其の終局の目的にあらざる事を主張するものであり、又夫れが勞働者の自由獨立の生產者たらんとする、倫理的道德的動機、創造的衝動に基く Self-expansion を要求する解放的使命である事を主張するものである。私はラスキンが勞働問題を倫理的に解決して先づ勞働者の心的解放を叫んだ事に就き既に幾度となく述べて來た。今此處に改めて、彼の勞働運動に對する態度につき叙述するの必要を認めぬ。た

だ彼の著、藝術經濟學(a joy for ever)や、二つの道、時と潮等に現れた思想が、會まSt. George Guild に具體化し、今日の如き少數の資本家が獨斷的に生產經營するの產業組織を根本的に打破し、生產の總ての管理をギルドに掌握せしめなければならぬと云ふ終局の主張を少さき十三エーカーの地上に行つた事を述べたに止まる。

尙ほ此の外實行家としてのラスキンについては特にトルストイと比較して『人道主義經濟學者としてのラスキン』を默想するに止める。

* * * * * * *

ラスキンとロゼッチ

ラスキンとロゼッチ

—1922.5.5—

美術批評家としてのラスキンを知らんと欲するものには、ターナーやハントやミレーロゼッチの私生活を詳しく讀んで置く事が誠に興味あり又必要な事である。ラスキンの研究は私の家業以上に大切な仕事で、自らの魂の生活には幾カロリーの榮養熱よりもロゼッチの評傳を一行でも取調らべる事が滋養となる。雜然たる銀座の街の小僧には殊に讀書による清涼劑が必要だ。十五年あまりも習學した英語がやつと役立つて、日本書紀や古事記や源氏物語を繙く代りに Ruskin とか Pre-Raphaelitism とか Rossetti と言ふ横文字に尊敬と愛を感じて來た。

日本語に對してすまぬと思ひながらも此の頃は英語に親しみ勝ちだ。でも私はご飯と味噌汁で育つた人間で決してパンやチーズにお世話にならなくつても宜いのだから此の拙文を綴るにも難解な英文字にはずい分苦るしめられた。然し此の苦痛もあと二十年したらだん〳〵と淡らいで源氏物語や徒然草を讀むよ

りは樂になるだろうと思つて居る。

Pre-raphaelitsm と云ふ英字は仲々やさしくないものであつた。ほんとに此の意議を解する爲めには中世史やルネサンスや英國の美術史を確實に頭に入れて置かねばならぬ、そして夫れが唯のアウトラインのみでは駄目らしい。私はほんとに困つて、ブリタニカをあさつて見たり外かの本のindexで此の言葉を引いては讀んだりして見たが結局次の小序を書いたに止まる。他人に嗤れても此の序と題する數十行は私の勞作である。

一小序

ラスキンとロゼッチを結びつけるものは、殆んど同時代に同國に生れて、同じ都會に、同じ藝術の道に從事したと言ふ事實よりも Pre-Raphaelitism の一字に聯想されて結合さるゝと説明するのが簡略である。從つて此の兩者の私交を論ずる前にはラファエル前派を抄説するが順序であろう。

詩人キーツが言ふ如くラファエル以前の藝術は其の以後のものに勝さると説

へらるゝのも全くラファエル後の繪畫が非宗教的であり神聖の感じに乏しいからだ。これは確に眞理であつたろうと思ふ。古の作家は献身的だつた、從つて其の製作が快樂的でなく奢侈道から脱して居た。その二十五歳の春ラファエルが Vaticano 宮殿の壁畫を描いたが、このものにこそ唯美的な近世的繪畫と純宗教畫との正に中間に位すべきもので、彼の繪畫が一面宗教畫の終りであると同時に犯聖畫の始めである事を教示する。

十九世紀は藝術界に於ける The Second Renaissance であり、殊に繪畫上の復興として最も注意すべきは此の Pre-Raphaelism の運動であつた。或る學者は特に是れを Renaissance of Wonder と呼ぶ。誠にこの驚異こそ美しく嚴肅なるムーブメントであつた。此の運動の主調には四個の重要なる目的がある。Collingwood の説明によれば次の如くである。

(一)純なる思想をもて描寫すること。

(二)自然を表現せん爲めに深き注意をもつて自然を研究すること。

(三)ラファエル以前の技術上のコンベンショナルを、誇張的、プレテンディングな

缺陷を除去して眞實に感動すべき點を發見すること。

(四)ラファエル以前の古大家を理想として、たゞ佳良なる繪畫彫像のみを製作すること。

ラスキンも言へるが如くラファエル前派の一目的が『近世科學の援助によつて自然をば彼等の周圍にある如く描寫する』事は(一)と(二)の實行であつた。是れ誠に善良の自然主義に立脚するもので、他の(三)(四)とは稍調和生難き傾向があつた。即ちロゼッチの繪畫に於いて察せらる如く彼は、復古主義のスタンドポイントを去つて寧ろ自然主義に傾いて仕舞つた。『ロゼッチの主張と其の繪畫との間に甚しい矛盾がある』と言ふ批評家の言も全く誇張ではなかつた。彼は古代の畫家に於ける如く純雅なるものを製作しながら而も其の色彩に於いて唯美主義の特徴を心置きなく表現した。彼は古代畫家の如く宗教及び基督の事跡を題材と仕ながら、其の描くところ寧ろ詩的にして唯美的であつた。William Sharp の言は彼の性格と繪畫とを簡明に談るものである。

『父より南歐伊多利の血を受け、母よりサクソン系統を繼ぐ。彼は詩的畫人にして繪畫的詩人なり。情熱燃ゆる如く、憧憬と自然の美に夢み、限り無き情感に逍遙して宇宙の神秘に沒我す。その婦人の容貌に宿りし神秘の影と肉體の上に現れし艶なる色彩とは彼が中心性格より來れるものなり』

ラスキンも彼の自叙傳 Praeterita III 13. に

『ロゼッチは眞の英人にあらざりき、されど倫敦の Inferno に呵責の苦るしみをなせる大伊多利人なり。彼は成し能ふ可き最善を致せり。彼が出來得べき總てを敎へつくせり。されど彼の爲し遂げしものは極めて短かく、夫は彼が徒らに Animal Passion の强さに生き、trained Control と guiding faith を缺けるが故也』

と評論して居る。"Apollo" と題するライナック氏の美術史を讀んで見るとローレンス死後の英國繪畫は一種の官學派に墮ちて拙劣無意義のものとなつた。然し是れを救ひ一般公衆の眼と心を展らいたものは云ふまでもなく、此のラファエル前派の運動で此の派の最も著るしい特色は其の主知主義で、或意味の唯美主義に對する侮慢であつた。彼等はボティチエリやマンテナに其の範を求めたが決して卑しい模倣では無かつた。

ロゼッチ、ホルマン、ハント・ジョン・ミレー等はローヤルアカデミイの同窓であつたが社會の好評と技巧の點では、ハントとミレーがロゼッチを凌駕した。ロゼッチを敎養せるものは第一にラファエル前派の父たるM. F. Brownの敎訓及び其の眞摯なる自然主義であり、第二にはハントの精緻なる描寫、ミレーの美麗圓熟せる技能であり第三にはラスキンの溫かき批評と友情とであつた。然しながらプレラファライテズムの運動から若しもロゼッチの詩的補助を取り去るなれば、あのラスキンの文藻豐かなる諸論文と共に、其の運動の効果の上に偉大なる損失を來したのであろう。

【注】ラスキンのプレラファライテイズムを書いたのは一八五一年で、ターナーの死んだ日即ち十二月十九日であつて。ラファエル前派運動の最初は一八四八年八月八日の夜、ミレーの家でロゼッチ、ハントの三人が會合して、ラシニオの模寫せるカンボサントの壁畫帖を見て感激せるに創まる。私は未だラスキンのPre-Raphaelitismを精讀せず從つて此の問題に就きては愧づ可き知識を持つことを悲しむ者である。

二　シッダル嬢とラスキン

私は一日ひまに任せてラスキンの手紙集を讀んで見た。特にロゼッチとミレーに關するものを渉つて居たが次に譯したものはロゼッチが如何にシッダルを愛したかが理解さるゝ最もよき材料と思はれた手紙の一つである。一八五五年にヘンリイ、オークランドに宛てゝかゝれたもので月日は不明である。

『親愛なるオークランドよ、今日は君に再びラファエル前派についての或る他の心配な問題につき考へて貰らはねばならないのだ。恐らくこの事については既に君も悲しい考へをもつて居らるゝ事と思ふ。僕は別にこの事を君に打ちあけるについてロゼッチに相談はしなかつた。然しかつて其の作を君にも見て貰つた事のある若いあの娘の健康について彼は非常に心配し夫れが彼の藝術上の進歩に大きい障害を來すからだ。私は彼の悲しみが何時消さるゝかを疑ふ。そして其の結果がどんな影響を及ぼすかについては言ふ事が出來ぬ。ロゼッチはず

い分彼女を思つてゐるんだ。だから悪るい結果が來た時、この位彼の心に準備があるのか私には理らない。

三週間前にある倫敦の有名な醫者に見て貰つたところ片方の脚が非常に悪いのだとの事、家庭の彼女は決して氣樂でない。家族の人々は他の事には親切だが、彼女の藝術心に對しては全く同情がない。從つて此の冬の寒さに火さへもなく彼女の部屋にとぢこもつて習作せねばならないのだ。醫者はどうしても轉地した方が良いと奬めた。何うにも斯うにも仕樣がないけれど、ロゼッチに取つては唯彼女が清新な空氣に身を休めてゐると云ふ丈けでも彼の氣心は休まる事と思ふ。

彼女も一人で田舍に小さい家を借りるか又は部屋住居で轉地する事の出來る年頃と思ふ。たゞロゼッチは此のロンドンの町から彼女を移して、苦痛を脫せしむる方法を知らないし其の上今の處適當な伴侶が見出されない。

あなたのデボンシャイアの海岸の田舍家で看護して呉れる婦人を御存じではないか。シッダルは決して我まゝな世話のかゝる女ではないと思ふ。私はたゞ二度あつた切りだ。彼女の表情は誠に靜かだ。なる程其の氣立てが靜で善良で

あつたればこそロゼッチも魂をぶち込んで仕舞つたのだ。私は彼女の樣な、十四世紀時代のフローレンスの婦人の容貌を持つてゐる姿は未だ何處の壁畫にも見た事がない』

思ふにラスキンの手紙は誠に温かきものであつた。オークランド博士はラスキンの心よりの親友だ。彼は直ちに返事を書いてシッダルの爲に助力すると返答した。更らにラスキンはロゼッチとシッダルに手紙を書いてオークランドの好意を傳へた。(Works of Ruskin Vol. 36. P. 205)

ラスキンとロゼッチは凡そ十歲の年の差がある。彼がラファエル前派の人々と相識つたのは一八五一年 Coventry Patmore を通じてに始まる。そのロゼッチとの初對面は三年の後であつた。ロゼッチがシッダルを識つたのは一八五二年の秋だ。ラスキンが三十五歲、ロゼッチが二十五歲、シッダルが二十歲であつた。彼は此の一對の男女の Patron であつた。然し凡てに謙讓なラスキンは最も善良なパトロンとしての美德を示した。次に掲ぐるはラスキンの傳記家 E. T. Cook の言葉である。

He said, only to please himself: Rossetti need feel no more sense of obligation than in accepting "a cup of tea." (Introduction, Vol.36. J. Ruskin)

ロゼッチをして神經質な天才詩人畫家たるロゼッチをしてかくの如く何等の obligation を感ぜしめ無かつたのはラスキンの德である。

シッダル孃に對する彼の態度も亦同じだ。彼女の都合のいゝ時に仕上げたデッサンや繪畫に對して一ヶ年百五十ポンド(千三百圓)の謝金を約束した。そして次の如く告白して居る。

『シッダルが心持ちよく受け取つて呉れるなら、私の悅こびは非常のものである。私の謝金は彼女が a glass of water when she was thirsty の心持ちであつて貰らいたい。何も夫れ以上を望む理けぢやないから』

資本主義の經濟が世界を支配する限り Patron の特異な存在を否む理けには行かぬ。此の場合ロゼッチもシッダルも勞働者でラスキンは資本家であつた。ラスキンのユトピア的の思想は此の後に追々と現はれて來るのであるが、Patron としての彼の態度の中にも凡てに彼れが或意味の共產的な社會主義者としての暗

示を表示してるではあるまいかと思ふ。所謂資本家なるものが『幸福』を感ずる時『分配』に氣附くものである。彼は謙讓な德の持主だ。ロゼッチとシッダルに Obligation を感ぜしめ無かつたラスキンの用意と努力は、現今日本の藝術界に所謂ペトロンを氣取るブルジュアに對しても最も價値ある教訓だ。

ロゼッチ及び其の周圍の人々はシッダル孃を呼んで "Guggum" と言つた。其頃二人は既でにエンゲーヂの悅こびにあつた。ラスキンは此の二人を愛し護つた。彼はシッダルを呼んで "Ida" と言つた。疑もなく此の名はテニスンの詩『主女』から來たものである。或日ラスキンはロゼッチとシッダルを其のデンマークヒルの家に招いて歡待した。ラスキンの兩親も心より此の二人の訪をよろこんだ。ロゼッチは一八五五年四月十三日その師 Madox Brown に手紙を書いて次の如く其の模樣を記めた。

『ラスキン家の人々は Guggum (シッダル孃)に逢つてすつかりよろこんだ。ジョン、ラスキンは彼女は實にノーブルだ、グローリヤスだと言つた。ラスキンの父は彼女の容貌や動作から判斷して何うしても伯爵夫人に見えると評した。』

シッダルは頗る人目をひく顔だ。ロゼッチの繪いた彼女がモデルとしての像は總明と鋭敏と哀調との表現である。二人が婚約後の生活は同人の見る目も羨ましき花やかなものであつた。彼女はロゼッチの薫陶とラスキンの保護により藝術家としての素質を益々向上展開した。

然しまもなく二人は別離するの狀態に置かれた。其の理由には二つある。第一はシッダル嬢は美人で明るい女性であつたが、教育ある女性では無かつた爲め自ら進んでロゼッチの忠言を容れ或る學校に入學することゝなつたからだとも云ひ又第二には二人の間に不和の生じたる時ラスキンの計らいにて彼女を一時故鄕のシエフィールドに休養せしめたとも言はれて居る。其の何れにしても、シッダルは一時倫敦を去つて長い事歸來しなかつた。

ロゼッチとシッダルが結婚したのは一八六〇年の五月だ。彼等は無論幸福であるべきだ。然し結婚後幾何もなくして新夫人は病の床についた。花やかな短い結婚後の生活、新らしい家庭には何かにつけて忙しい空氣の漲るものであるが此のロゼッチ夫妻のホームにも寂しさと心配と悅こびの氣分が訪れた。彼等は

親友さへも忘れ勝ちだ。ラスキンも彼等から忘れられ行く一人であつた。次の手紙はラスキンが彼等の結婚當初と、夫れから少し立つて rift が出來てから書かれたものゝ抄譯である。

『旅行から歸へつて始めて此の手紙を書く。お二人に對し手紙よりも御面談の上御祝ひ申上げたかつたのだが昨日まで Chatham place のお二人のアドレスが理らなかつたのだ。

どうかなるべく早くお日にかゝりたく御訪れを待つて居る。心よりの敬意と愛とをお二人に奉る

一八六〇年九月四日

デンマークヒルにて

ラスキン』

其後別にロゼッチ夫妻はラスキンを訪るゝ事もなく亦彼もこの新夫婦を尋ることもなく其のまゝに打ち過ぎた。唯時々の交通のみがお互いの感情を繼いで行つた。ロゼッチは彼を訪れざる理由を書いて送つた。その返事は次の如くである。

『親愛なるロゼッチよ、御親書ありがたう。私はあなたの御動靜並びに御言葉の趣がよく解りました。

然し平素あなたについて感ずるところのものは、あなたが御氣附きなく何時も利己的であると云ふことだ。そして唯もうあなたは或事を行つて見たいと か、行つて見たくないとか言ふ事を考へるのみで、夫れが何う云ふものであるかを判じない。……斯う私に會つて呉れないのは私を何等省みて呉れないからだ。……あなたの心持ち次第で私を好む事が出來る……然し或は私の想像以上にあなた方は私に好意を持つて居て呉れるかも知れないが……

ジョン、ラスキン』

一八六二年二月十一日ロゼッチ夫人の悲しい死が到來した。ロゼッチの沈默も暫らくつゞき、ラスキンも默した。

* * * * * * *

三　彼の詩とラスキン

一八五〇年一月一日の發行たるロゼッチ等の同人雜誌 "Germ" は若芽の如く萠え出でし彼等が理想の "Art and Poetry" のパンフレットであつた。ラスキンは彼等の主張たるモットー、

"to encourage and enforce an entire adherance to the simplicity of Nature"

を讃美した。

無論ラスキンはロゼッチの詩人たる天賦を認めたが、彼はその畫人としての天才を愛した。從つて詩の勞作を以つて彼の畫作を犧牲とする無からんことを心に希つた。殊に物質上豐かでない彼がシッダル孃と婚約せし時は一層この事について心配した。一八七八年十一月のナインティース、センチュリイに載せたラスキンの論文『ラファエル前派の三色に就いて』の中にも此の考へが記るされてある。

ロゼッチの詩が想像に富み而も精緻なる事はラスキンの感嘆せるところであつた。バイロンに私淑しブラウニングの影響をも受けた。彼は同時に伊多利の作物にも注意した。彼が詩歌に於いてラファエル前派の運動に畫せる功績は Renaissance of Wonder をして一層に光輝あらしめた。

然し前にも述べし如くラスキンのロゼッチに對する親切な心は彼をして繪畫に其の天才を見出さんとした。詩と繪とは同じリズムのものである。而も彼がロゼッチに要求せしむるものは寧ろ詩にあらで其の色彩である。

ラスキンは決して Poet-Painter を否定するのぢやない。ロゼッチが『初期の伊多利詩人』を出版せしは全く彼が物質的援助に負ふ。遠慮なき批評を繪畫にも爲された如く彼の詩に就いても善惡共に成された。

『ラファエル前派の三色に就いて』と言ふ論説にはとり分け美につきての批評はない。唯ラスキンの彼の詩に對する心持丈けは次の如く記載されて居る。

"Mr. Rossetti threw more than half his strength into literature, ond in that precise measure, left himself unequal to his appointed task in painting"

批評家としてのラスキンは凡ては彼に行き渡つて居るがロゼッチの詩についてラスキンは將に一文を掲げて批評した事がない。唯其の手紙や論文の小部分に斷片的の批評が載されたに止まる。

"Blesed Damozel" "Burden of Nineveh" "Jenny" "Love's Nocturn" "Sister Helen"

等はラスキンの手紙や批評中に見出さるゝロゼッチの詩である。

『親愛なるロゼッチよ、私は今君の Jenny を讀んだ。他の詩よりも非常の注意と感銘とをもつて讀んだ。然し今少しく君は一般讀者の爲めに現代式にやれば良かつたのだ。

私は此のジェニィを了解する者は極小數だと思ふ。……

デンマーク、ヒル　ラスキン』

或批評家はラスキンの彼に對する態度を以つて too Much critic と言ひ、ロゼッチはラスキンに對して何時もあまりに過敏でおこりつぽかつたと言つた(然し此の批評は當つて居る。)單に此の Jenny に對するのみならず、バードウン、オブ、ニネベやシスター、ヘレンなどにも樣々の批評を書いてロゼッチに送つて居る。ロゼッチも或時は其の批評に感謝し亦或時は眞赤になつて怒つた。

ラスキンも評する如くロゼッチの詩はどこまでもロゼッチの詩であつて先行者の imitation は毫もない。彼は沙翁、スコット、バイロンを愛讀した。然し彼には

何の影響もなかつた。彼は亦キーツやダンテを愛誦した。然し何の面影もないと言はれて居る。

【註】ロゼッチの詩についてはもつと言ふ可きこともあろふ然しラスキンに關するものは淺學の自分に取つては是れで至れり盡せりである。ラスキンを離れてロゼッチは今のところ殆んど用がないからである。

* * * * * * *

四　ロゼッチの調色とラスキン

『ロゼッチとラスキン』と題する論文としては最も重要なる章節でなければならぬ然かもラスキンの數多き著書中には最も多く批評されてある點なれば拙稿にて是れを omit するのは心より愧づるものである。然し私は唯一言、時と志はあれど學及ばずと告白して自らの淺學を心より謝す。次に掲ぐるは其の主たる記載の index である。御參考まで に

I. Pre-Raphaelite School の Founder 並びに Vital force としての Rossetti——

(イ) 1875 Academy Notes, Royal Academy.

(ロ) 1867. Modern art, Sec. 12

(ハ) 1870. Lectures on Arts, (宗教と美術の關係)

(ニ) 1880 Arrows of the Chace 中の手紙

II. 近代 Romantic 派に於ける Rossetti の主知力

(イ) 1883. The Art of England (Realistic School of painting)

(ロ) 3 colour of Pre-Raphaelitism

III. Rossetti の色彩に就いて

(イ) 1857. Elements of Drawing, on Colour

(ロ) 1886. Notes on Millais 中の J. R の手紙

(ハ) 1883. The art of England, (R. S. of Painting)

其他は Library Edition の Vol. 36 參照

大正十一年九月廿五日印刷
大正十一年九月廿八日發行

版權所有

檢印

厚生閣
檢印證

定價三圓二十錢

著者　東京市京橋區銀座四丁目　御木本隆三

發行者　東京市芝區西久保八幡町五　岡本正一

印刷者　東京市京橋區南鍛冶町　牧口駒三郎

製本者　東京市神田區錦町三丁目　牧祥之助

東京市芝區西久保八幡町廿五番地
振替東京五九六〇〇番
厚生閣

古考
原人究話

理學博士 佐藤傳藏 譯

有史以前の原人文化史！

思へ！ 幾萬年以前の人類創生時代の光景を！ 寒氣凜烈たる大氷原時代あり、眉秀で頭長く額の窪んだ短大頭健な原人が東半球に住せるあり或は江河の漂積層中に住へる江河漂積層人あり、その他洞窟人種、湖上住居人種、峭壁人種等、夫等が何れも天然の氣候と戰ひ、猛獸海蛇の類と爭鬪し、石器時代、銅器時代、鐵器時代を得て、漸く人間文化の第一歩を築くに至る迄の有史以前の狀態を、考古學者の立場より叙述したるもの、何れも地中界の埋藏物——先史時代都市の址、建築物人骨、獸骨、骨器、石器、土器、銅器、鐵器等に據つて推定せしものなり。殊に原人の生活狀態のみならず、遺物を通じて彼等の知識の發達階梯をも知り得れば、單に斯學の徒のみならず、一般の文學者、哲學者、宗教家にとつても、最も興味深き思考文獻と云はざるべからず。

文學者、哲學者、宗教家の思考文獻！

挿畫三十二圖

定價 二圓
送料 五十錢

507
39

終